

茶の本

茶の本

岡倉覚三

青空文庫

目次

第一章 人情の碗

茶は日常生活の俗事の中に美を崇拜する一種の審美的宗教すなわち茶道の域に達す——茶道は社会の上下を通じて広まる——新旧両世界の誤解——西洋における茶の崇拜——欧州の古い文献に現われた茶の記録——物と心の争いについての道教徒の話——現今における富貴権勢を得ようとする争い

第二章 茶の諸流

茶の進化の三時期——唐^{とう}、宋^{そう}、明^{みん}の時代を表わす煎茶^{せんちや}、

抹茶ひきちや、淹茶だしちや——茶道の鼻祖陸羽——三代の茶に関する理想——
—後世のシナ人には、茶は美味な飲料ではあるが理想ではない——
—日本においては茶は生の術に関する宗教である

第三章 道教と禅道

道教と禅道との関係——道教とその後継者禅道は南方シ
ナ精神の個人的傾向を表わす——道教は浮世をかかるとあき
らめて、この憂うき世の中にも美を見いだそうと努める——禅道は
道教の教えを強調している——精進静慮することによって自じ性じょう
了り解ようげの極致に達せられる——禅道は道教と同じく相対を崇拜す
る——人生の些さ事じの中にも偉大を考える禅の考え方が茶道の理想
となる——道教は審美的理想の基礎を与え禅道はこれを実際的な

ものとした

第四章 茶室

茶室は茅屋ぼうおくに過ぎない——茶室の簡素純潔——茶室の

構造における象徴主義——茶室の裝飾法——外界のわずらわしさを遠ざかった聖堂

第五章 芸術鑑賞

美術鑑賞に必要な同情ある心の交通——名人とわれわれの間の内密の默契——暗示の価値——美術の価値はただそれがわれわれに語る程度による——現今の美術に対する表面的の熱狂は真の感じに根拠をおいていない——美術と考古学の混同——われわれは人生の美しいものを破壊することによって美術を破壊して

いる

第六章 花

花はわれらの不断の友——「花の宗匠」——西洋の社会における花の浪費——東洋の花卉栽培かきさいばい——茶の宗匠と生花の法則——生花の方法——花のために花を崇拜すること——生花の宗匠——生花の流派、形式派と写実派

第七章 茶の宗匠

芸術を真に鑑賞することはただ芸術から生きた力を生み出す人にもみ可能である——茶の宗匠の芸術に対する貢献——処世上に及ぼした影響——利休の最後の茶の湯

注

茶の本

第一章 人情の碗

茶は薬用として始まり後飲料となる。シナにおいては八世紀に高雅な遊びの一つとして詩歌の域に達した。十五世紀に至り日本はこれを高めて一種の審美的宗教、すなわち茶道にまで進めた。

茶道は日常生活の俗事の中に存する美しきものを崇拜することに基づく一種の儀式であつて、純粹と調和、相互愛の神秘、社会秩序のローマン主義を諄々じゆんじゆんと教えるものである。茶道の要義は「不完全なもの」を崇拜するにある。いわゆる人生というこの不

可解なものうちに、何か可能なものを成就しようとするやさしい企てであるから。

茶の原理は普通の意味でいう単なる審美主義ではない。というのは、倫理、宗教と合して、天人てんじんに関するわれわれのいつさいの見解を表わしているものであるから。それは衛生学である、清潔をきびしく説くから。それは経済学である、というのは、複雑なぜいたくというよりもむしろ単純のうちに慰安を教えるから。それは精神幾何学である、なんとなれば、宇宙に対するわれわれの比例感を定義するから。それはあらゆるこの道の信者を趣味上の貴族にして、東洋民主主義の真精神を表わしている。

日本が長い間世界から孤立していたのは、自省をする一助とな

つて茶道の発達に非常に好都合であつた。われらの住居、習慣、衣食、陶漆器、絵画等——文学でさえも——すべてその影響をこ
うむっている。いやしくも日本の文化を研究せんとする者は、こ
の影響の存在を無視することはできない。茶道の影響は貴人の優
雅な閨房けいぼうにも、下賤げせんの者の住み家にも行き渡つてきた。わが田
夫は花を生けることを知り、わが野人も山水を愛めでるに至つた。
俗に「あの男は茶氣ちやきがない」という。もし人が、わが身の上にお
こるまじめながらの滑稽こっけいを知らないならば。また浮世の悲劇に
とんじやくもなく、浮かれ氣分で騒ぐ半可通はんかつうを「あまり茶氣が
あり過ぎる」と言つて非難する。

よその目には、つまらぬことをこのように騒ぎ立てるのが、実

に不思議に思われるかもしれぬ。一杯のお茶でなんとという騒ぎだ
ろうというであろうが、考えてみれば、煎せんずるところ人間享樂の
茶ちや碗わんは、いかにも狭いものではないか、いかにも早く涙であふ
れるではないか、無辺を求むる渴かわのきとまらぬあまり、一息に飲み
ほされるではないか。してみれば、茶碗をいくらもてはやしたと
とがめだてには及ぶまい。人間はこれよりもまだまだ悪いこと
をした。酒の神バツカスを崇拜するのあまり、惜しげもなく奉納
をし過ぎた。軍神マーズの血なまぐさい姿をさえも理想化した。
してみれば、カメリヤの女皇に身をささげ、その祭壇から流れ出
る暖かい同情の流れを、心ゆくばかり楽しんでよいではないか。
象牙ぞうげ色の磁器いろにもられた液体琥珀こはくの中に、その道の心得ある人

は、孔子こうしの心よき沈黙、老子ろうしの奇警、釈迦牟尼しやくかもにの天上の香にさえ触れることができる。

おのれに存する偉大なるものの小を感ずることのできない人は、他人に存する小なるものの偉大を見のがしがちである。一般の西洋人は、茶の湯を見て、東洋の珍奇、稚氣そでをなしている千百の奇癖のまたの例に過ぎないと思つて、袖の下で笑つていであろう。西洋人は、日本が平和な文芸にふけていた間は、野蛮国と見なしていたものである。しかるに満州の戦場に大々的殺戮さつりくを行ない始めてから文明国と呼んでいる。近ごろ武士道——わが兵士に喜び勇んで身を捨てさせる死の術——について盛んに論評されてきた。しかし茶道にはほとんど注意がひかれていない。この道は

わが生の術を多く説いているものであるが。もしわれわれが文明国たるためには、血なまぐさい戦争の名誉によらなければならぬ。いとすするならば、むしろいつまでも野蛮国に甘んじよう。われわれはわが芸術および理想に対して、しかるべき尊敬が払われる時期が来るのを喜んで待とう。

いつになつたら西洋が東洋を了解するであろう、否、了解しよう。と努めるであろう。われわれアジア人はわれわれに関して織り出された事実や想像の妙な話にしばしば胆きもを冷やすことがある。われわれは、ねずみや油虫を食べて生きていたのでないとしても、蓮はすの香を吸って生きていると思われている。これは、つまらない狂信か、さもなければ見さげ果てた逸楽である。インドの心霊性

を無知といい、シナの謹直を愚鈍といい、日本の愛国心をば宿命論の結果といつてあざけられていた。はなはだしきは、われわれは神経組織が無感覺なるため、傷や痛みに対して感じが薄いとまで言われていた。

西洋の諸君、われわれを種にどんなことでも言つてお楽しみなさい。アジアは返礼いたします。まだまだおもしろい種になることはいくらでもあろう、もしわれわれ諸君についてこれまで、想像したり書いたりしたことがすっかりおわかりになれば。すべて遠きものをば美しと見、不思議に対して知らず知らず感服し、新しい不分明なものに対しては、口には出さねど憤るということがそこに含まれている。諸君はこれまで、うらやましく思うことも

できないほど立派な徳を負わされて、あまり美しくて、とがめることのできないような罪をきせられている。わが国の昔の文人は——その当時の物知りであつた——まあこんなことを言っている。諸君には着物のどこか見えないところに、毛深いしつぽがあり、そしてしばしば赤ん坊の細切り料理こまぎを食べていると！ 否、われわれは諸君に対してもつと悪いことを考えていた。すなわち諸君は、地球上で最も実行不可能な人種と思つていた。というわけは、諸君は決して実行しないことを口では説いているといわれていたから。

かくのごとき誤解はわれわれのうちからすみやかに消え去つてゆく。商業上の必要に迫られて欧州の国語が、東洋幾多の港に用

いられるようになって来た。アジアの青年は現代的教育を受けるために、西洋の大学に群がってゆく。われわれの洞察力は、どうきつりよく諸君の文化に深く入り込むことはできない。しかし少なくともわれわれは喜んで学ぼうとしている。私の同国人のうちには、諸君の習慣や礼儀作法をあまりに多く取り入れた者がある。こういう人は、こわばったカラや丈たけの高いシルクハットを得ることが、諸君の文明を得ることと心得違いをしていたのである。かかる様子ぶりは、実に哀れむべき嘆かわしいものであるが、ひざまずいて西洋文明に近づこうとする証拠となる。不幸にして、西洋の態度は東洋を理解するに都合が悪い。キリスト教の宣教師は与えるために行き、受けようとはしない。諸君の知識は、もし通りすがり

の旅人のあてにならない話に基づくのでなければ、わが文学の貧弱な翻訳に基づいている。ラフカディオ・ハーンぎきよつてきの義侠的ペン、または『インド生活の組織（一）』の著者のそれが、われわれみずからの感情の松たいまつ明をもつて東洋の闇やみを明るくすることはまれである。

私はこんなにあけすけに言つて、たぶん茶道についての私自身の無知を表わすであろう。茶道の高雅な精神そのものは、人から期待せられていることだけ言うことを要求する。しかし私は立派な茶人のつもりで書いているのではない。新旧両世界の誤解によつて、すでに非常な禍わざわいをこうむつていのであるから、お互いがよく了解することを助けるために、いささかなりとも貢献するに

弁解の必要はない。二十世紀の初めに、もしロシアがへりくだつて日本をよく了解していたら、血なまぐさい戦争の光景は見ないで済んだであらうに。東洋の問題をさげすんで度外視すれば、なんといい恐ろしい結果が人類に及ぶことであらう。ヨーロッパの帝国主義は、黄禍のばかげた叫びをあげることを恥じないが、アジアもまた、白禍の恐るべきをさとるに至るかもしれないということ、わかりかねている。諸君はわれわれを「あまり茶気があり過ぎる」と笑うかもしれないが、われわれはまた西洋の諸君には天性「茶気がない」と思うかもしれないではないか。

東西両大陸が互いに奇警な批評を飛ばすことはやめにして、東西互いに得る利益によつて、よし物がわかつて来ないとしても、

お互いにやわらかい気持ちになろうではないか。お互いに違った方面に向かつて発展して来ているが、しかし互いに長短相補わない道理はない。諸君は心の落ちつきを失つてまで膨張発展を遂げた。われわれは侵略に対しては弱い調和を創造した。諸君は信ずることができませんか、東洋はある点で西洋にまさっているということをしることを！

不思議にも人情は今までのところ茶碗ちやわんに東西相合している。

茶道は世界的に重んぜられている唯一のアジアの儀式である。白人はわが宗教道徳を嘲ちやうしやう笑しやうした。しかしこの褐かつしやく色いんりやう飲料りやうは

躊躇ちゆうちよもなく受け入れてしまった。午後の喫茶は、今や西洋の

社会における重要な役をつとめている。盆や茶托ちやたくの打ち合う微

妙な音にも、ねんごろにもてなす婦人の柔らかい絹ずれの音にも、また、クリームや砂糖を勧められたり断わったりする普通の問答にも、茶の崇拜は疑いもなく確立しているということがわかる。渋いか甘いか疑わしい煎せんちや茶の味は、客を待つ運命に任せてあきらめる。この一事にも東洋精神が強く現われているということがわかる。

ヨーロッパにおける茶についての最も古い記事は、アラビヤの旅行者の物語にあると言われている、八七九年以後カントン広東における主要なる歳入の財源は塩と茶の税であったと述べてある。マルコポーロは、シナの市舶司が茶税を勝手に増したために、一二八五年免職になったことを記録している。ヨーロッパ人が、極東に

ついでに、いっそう多く知り始めたのは、実到大発見時代のころである。十六世紀の終わりにオランダ人は、東洋においてかんぼく灌木の葉からさわやかな飲料が造られることを報じた。ジオヴァーニ・バテスタ・ラムージオ（一五五九）、エル・アルメイダ（一五七六）、マフエノ（一五八八）、タレイラ（一六一〇）らの旅行者たちもまた茶のことを述べている（二）。一六一〇年に、オランダ東インド会社の船がヨーロッパに初めて茶を輸入した。一六三六年にはフランスに伝わり、一六三八年にはロシアにまで達した。英国は一六五〇年これを喜び迎えて、「かの卓絶せる、かつすべての医者の推奨するシナ飲料、シナ人はこれをチャと呼び、他国民はこれをテイまたはティーと呼ぶ。」と言っていた。

この世のすべてのよい物と同じく、茶の普及もまた反対にあった。ヘンリー・セイヴイル（一六七八）のような異端者は、茶を飲むことを不潔な習慣として口をきわめて非難した。ジョウナス・ハンウェイは言った。（茶の説・一七五六）茶を用いれば男は身のたけ低くなり、みめをそこない、女はその美を失うと。茶の価の high ために（一ポンド約十五シリング）初めは一般の人の消費を許さなかった。「歓待饗きょう応おう用の王室御用品、王侯貴族の贈答用品」として用いられた。しかしこういう不利な立場にあるにもかかわらず、喫茶は、すばらしい勢いで広まって行った。十八世紀前半におけるロンドンのコーヒー店は、実際喫茶店となり、アデイソンやステイールのような文士のつどいととなり、茶

を喫しながらかれらは退屈しのぎをしたものである。この飲料はまもなく生活の必需品——課税品——となった。これに関連して、現代の歴史において茶がいかに主要な役を務めているかを思い出す。アメリカ植民地は圧迫を甘んじて受けていたが、ついに、茶の重税に堪えかねて人間の忍耐力も尽きてしまった。アメリカの独立は、ボストン港に茶箱を投じたことに始まる。

茶の味には微妙な魅力があつて、人はこれに引きつけられないわけにはゆかない、またこれを理想化するようになる。西洋の茶人たちは、茶のかわりとかれらの思想の芳香を混ざるに鈍ではなかつた。茶には酒のような傲慢ごうまんなところがない。コーヒーのよくな自覚もなければ、またココアのような気取つた無邪気もない。

一七二一年にすでにスペクテイター紙に次のように言っている。「それゆえに私は、この私の考えを、毎朝、茶とバタつきパンに一時間を取っておかれるような、すべての立派な御家庭へ特に勧めたいと思います。そして、どうぞこの新聞を、お茶のしたくの一部として、時間を守って出すようにお命じになることを、せつにお勧めいたします。」サミュエル・ジョンソンはみずからの人物を描いて次のように言っている。「いんごう因業な恥知らずのお茶飲みで、二十年間も食事を薄くするにただこの魔力ある植物の振り出しをもつてした。そして茶をもつて夕べを楽しみ、茶をもつて真夜中を慰め、茶をもつてあした晨を迎えた。」

ほんとうの茶人チャールズ・ラムは、「ひそかに善を行なつて

偶然にこれが現われることが何よりの愉快である。」というところ
ろに茶道の真髓を伝えている。というわけは、茶道は美を見いだ
さんがために美を隠す術であり、現わすことをはばかるようなも
のをほのめかす術である。この道はおのれに向かつて、落ち着い
てしかし充分に笑うけだかい奥義である。従つてヒューマーその
ものであり、悟りの微笑である。すべて真に茶を解する人はこの
意味において茶人と言つてもよからう。たとえばサツカレー、そ
れからシェイクスピアはもちろん、文芸はいたいき 廃頹期の詩人もまた、
(と言つても、いずれの時か廃頹期でなかろう) 物質主義に対す
る反抗のあまりいくらか茶道の思想を受け入れた。たぶん今日に
おいてもこの「不完全」を真摯しんしに静観してこそ、東西相会して互

いに慰めることができるであろう。

道教徒はいう、「無始」の始めにおいて「心」と「物」が決死の争鬪をした。ついに大日輪こうてい黄帝は闇やみと地の邪神しゆくゆう祝融しゆくゆうに打ち勝った。その巨人は死苦のあまり頭を天てん涯がいに打ちつけ、硬玉の青天を粉碎した。星はその場所を失い、月は夜の寂寞せきばくたる天空をあてもなくさまようた。失望のあまり黄帝は、遠く広く天の修理者を求めた。捜し求めたかいはあつて東方の海から女媧じよかという女皇、角つのをいただき竜尾りゆうびをそなえ、火の甲冑かっちゆうをまといつてさんぜん燦然たる姿で現われた。その神は不思議な大釜おおがまに五色の虹にじを焼き出し、シナの天を建て直した。しかしながら、また女媧は蒼そ天うてんにある二個の小隙しょうげきを埋めることを忘れたと言われている。

かくのごとくして愛の二元論が始まった。すなわち二個の霊は空間を流転してとどまることを知らず、ついに合して始めて完全な宇宙をなす。人はおのおの希望と平和の天空を新たに建て直さなければならぬ。

現代の人道の天空は、富と権力を得んと争う莫^{ばくだい}大な努力によつて全く粉碎せられている。世は利己、俗悪^{やみ}の闇に迷っている。知識は心にやましいことをして得られ、仁は実利のために行なわれている。東西両洋は、立ち騒ぐ海に投げ入れられた二竜^{りゅう}のごとく、人生の宝玉を得ようとすれどそのかいもない。この大荒廃を繕うために再び女媧^{じよか}を必要とする。われわれは大権化^{だいごんげ}の出現を待つ。まあ、茶でも一口すすろうではないか。明るい午後の日は

竹林にはえ、泉水はうれしげな音をたて、
松しゅうらい 籟らい はわが茶釜ちやがま
に聞こえている。はかないことを夢に見て、美しい取りとめのな
いことをあれやこれやと考えようではないか。

第二章 茶の諸流

茶は芸術品であるから、その最もけだかい味を出すには名人を要する。茶にもいろいろある、絵画に傑作と駄作と——概して後者——があると同様に。と言つても、立派な茶をたてるのにこれぞという秘法はない、テイシアン、雪村せつそんのごとき名画を作製するのに何も規則がないと同様に。茶はたてるごとに、それぞれ個性を備え、水と熱に対する特別の親和力を持ち、世々相伝の追憶を伴ない、それ独特の話しぶりがある。真の美は必ず常にここに

存するのである。芸術と人生のこの単純な根本的法則を、社会が認めないために、われわれはなんとという損失をこうむっていることであろう。宋の詩人李仲光^{りちゆうこう}は、世に最も悲しむべきことが三つあると嘆じた、すなわち誤れる教育のために立派な青年をそこなうもの、鑑賞の俗悪なために名画の価値を減ずるもの、手ぎわの悪いために立派なお茶を全く浪費するものこれである。

芸術と同じく、茶にもその時代と流派とがある。茶の進化は概略三大時期に分けられる、煎茶^{せんちや}、抹茶^{ひきちや}および掩茶^{だしちや}すなわちこれである。われわれ現代人はその最後の流派に属している。これら茶のいろいろな味わい方は、その流行した当時の時代精神を表わしている。と言うのは、人生はわれらの内心の表現であり、

知らず知らずの行動はわれわれの内心の絶えざる発露であるから。孔子いわく「人いづくんぞかくさんや、人いづくんぞかくさんや」と。たぶんわれわれは隠すべき偉大なものが非常に少ないからである。う、些事さじに自己を顕あらわすことが多すぎて困る。日々起こる小事件も、哲学、詩歌のこうしやう高翔と同じく人種的理想の評論である。愛好するふどうしゆ葡萄酒の違いでさえ、ヨーロッパのいろいろな時代や国民のそれぞれの特質を表わしているように、茶の理想もいろいろな情調の東洋文化の特徴を表わしている。煮る団茶、かき回す粉茶、淹だす葉茶はぢやはそれぞれ、唐とう、宋そう、明みんの気分を明らかに示している。もし、芸術分類に濫用された名称を借りるとすれば、これらをそれぞれ、古典的、ローマン的、および自然主義的な茶の諸流

と言えるであろう。

南シナの産なる茶の木は、ごく早い時代からシナの植物学界および薬物学界に知られていた。古典には、※^た、※^{せつ}、※^{せん}、檳^か、茗^{みょう}、
 というようないろいろな名前で書いてあつて、疲労をいやし、精神をさわやかにし、意志を強くし、視力をととのえる効能があるために大いに重んぜられた。ただに内服薬として服用せられたのみならず、しばしばリューマチの痛みを軽減するために、煉^{れん}葉^{やく}として外用薬にも用いられた。道教徒は、不死の靈薬の重要な成分たることを主張した。仏教徒は、彼らが長時間の黙想中に、睡魔予防剤として広くこれを服用した。

四五世紀のころには、揚^{よう}子^す江^{こう}流域住民の愛好飲料となつた。

このころに至って始めて、現代用いている「茶」という表意文字が造られたのである。これは明らかに、古い「※」の字の俗字であろう。南朝の詩人は「液体硬玉の泡沫」を熱烈に崇拜した跡が見えている。また帝王は、高官の者の勲功に対して上製の茶を贈与したものである。しかし、この時期における茶の飲み方はきわめて原始的なものであった。茶の葉を蒸して臼に入れてつき、団子として、米、薑、塩、橘皮、香料、牛乳等、時には葱とともに煮るのであった。この習慣は現今チベット人および蒙古種族の間に行なわれていて、彼らはこれらの混合物で一種の妙なシロツプを造るのである。ロシア人がレモンの切れを用いるのは——彼らはシナの隊商宿から茶を飲むことを覚えたのであるが——この

古代の茶の飲み方が残っていることを示している。

茶をその粗野な状態から脱して理想の域に達せしめるには、実に唐朝の時代精神を要した。八世紀の中葉に出た陸羽りくう（三）をもつて茶道の鼻祖とする。かれは、仏、道、儒教が互いに混淆こんこうせんとしている時代に生まれた。その時代の汎神論はんしんろん的象徴主義に促されて、人は特殊の物の中に万有の反映を見るようになった。詩人陸羽は、茶の湯に万有を支配しているものと同一の調和と秩序を認めた。彼はその有名な著作茶経（茶の聖典）において、茶道を組織立てたのである。爾来じらい彼は、シナの茶をひさぐ者の保護神としてあがめられている。

茶経は三巻十章よりなる。彼は第一章において茶の源を論じ、

第二章、製茶の器具を論じ、第三章、製茶法を論じている（四）。彼の説によれば、茶の葉の質の最良なものは必ず次のようなものである。

胡人のこじんかわぐつのごとくなる者しゆくしゆくぜん蹙しゆくしゆくぜん然ぜんたり（五）
ほうぎゆう牛の

臆むねなる者れんせんぜん廉れんせんぜん※然ぜんたり（六）
 浮雲の山をいずる者かんせんぜん輪澹然かんせんぜんたり

（七）
けいえん輕けいえん颺えんの水を払う者かんせんぜん涵澹然かんせんぜんたり（八）
 また新治の

地なる者りゆうりよう暴雨りゆうりよう流りゆうりよう潦りゆうりようの経る所に遇あうがごとし（九）

第四章はもつぱら茶器の二十四種を列举してこれについての記述であつて、風炉（一〇）に始まり、これらのすべての道具を入れる都ちやだんす籃だんすに終わっている。ここにもわれわれは陸羽の道教象徴主義に対する偏好を認める。これに連関して、シナの製陶術に

及ぼした茶の影響を観察してみることもまた興味あることである。シナ磁器は、周知のごとく、その源は硬玉のえも言われぬ色合いを表わそうとの試みに起こり、その結果唐代には、南部の青磁と北部の白磁を生じた。陸羽は青色を茶碗ちやわんに理想的な色と考えた、青色は茶の緑色を増すが白色は茶を淡紅色にしてまずそうにするから。それは彼が団茶を用いたからであつた。その後宋そうの茶人らが粉茶を用いるに至つて、彼らは濃藍のうらんしよく色および黒褐こくかつしよく色の重い茶碗を好んだ。明みんじん人は淹茶だしちやを用い、軽い白磁を喜んだ。

第五章において陸羽は茶のたて方について述べている。彼は塩以外の混合物を取り除いている。彼はまた、これまで大いに論ぜられていた水の選択、煮沸の程度の問題についても詳述している。

彼の説によると、その水、山水を用うるは上、江水は中、井水は下である。煮沸に三段ある。その沸、魚目（一一）のごとく、すこし声あるを一沸となし、縁辺の涌泉蓮珠（一二）のごとくなるを二沸となし、騰波鼓浪（一三）を三沸となしている。団茶はこれをおぼつて嬰兒の臂のごとく柔らかにし、紙袋を用いてこれをたくわう。初沸にはすなわち、水量に合わせてこれをととのうるに塩味をもつてし、第二沸に茶を入れる。第三沸には少量の冷水をかまに注ぎ、茶を静めてその「華（一四）」をやしなをや育う。それからこれを茶碗に注いで飲むのである。これまさに神酒！晴天爽そ朗うろうなるに浮雲鱗然ふうんりんぜんたるあるがごとし（一五）。その沫あわは緑錢ろせうの水すい涓いに浮かべるがごとし（一六）。唐の詩人盧同の歌ったのは

このような立派な茶のことである。

一わんこうふん腕喉 吻潤い、二こもん腕孤悶を破る。三腕枯腸をさぐる。惟おもう

文字五千卷有り。四腕軽汗を発す。平生不平の事ことごとく

毛孔に向かつて散ず。五きこつ腕筋骨清し。六せんれい腕仙靈に通ず。七

腕きつ吃し得ざるに也またただ覚ゆ 両りようえき腋 習々清風の生ずるを。蓬ほ

菜山うらいさんはいづくにかある 玉川子ぎよくせんしこの清風に乗じて帰りな

んと欲す（一七）。

茶経の残りの章は、普通の喫茶法の俗悪なこと、有名な茶人の簡単な実録、有名な茶園、あらゆる変わった茶器、および茶道具のさし絵が書いてある。最後の章は不幸にも欠けている。

茶経が世に出て、当時かなりの評判になったに違いない。陸羽

は代宗だいそう（七六三—七七九）の援たすくるところとなり、彼の名声はあがつて多くの門弟が集まつて来た。通人の中には、陸羽のたてた茶と、その弟子でしのたてた茶を飲み分けることができる者もいたということである。ある官人はこの名人のたてた茶の味がわからなかつたために、その名を不朽に伝えている。

宋代そうだいには抹茶ひきちやが流行するようになって茶の第二の流派を生じた。茶の葉は小さな白うすで挽ひいて細粉とし、その調製品を湯に入れて割り竹製の精巧な小筴こぼうきでまぜるのであった。この新しい方法が起こつたために、陸羽が茶の葉の選択法はもちろん、茶のたて方にも多少の変化を起こすに至つて、塩は永久にすてられた。宋人の茶に対する熱狂はとどまるところを知らなかつた。食道楽

の人は互いに競うて新しい変わった方法を発見しようとした、そしてその優劣を決するために定時の競技が行なわれた。徽宗皇帝きしやう（一一〇一—一二四）はあまりに偉い芸術家であつて行ないよろしきになつた王とはいえないが、茶の珍種を得んためにその財宝を惜しげもなく費やした。王みずから茶の二十四種についての論を書いて、そのうち、「白茶」を最も珍しい良質のものであるといつて重んじている。

宋人の茶に対する理想は唐人とは異なつていた、ちやうどその人生観が違つていたように。宋人は、先祖が象徴をもつて表わそうとした事を写實的に表わそうと努めた。新儒教の心には、宇宙の法則はこの現象世界に映らなかつたが、この現象世界がすなわ

ち宇宙の法則そのものであつた。永劫えいごうはこれただ瞬時——涅槃ねはんはつねに掌握のうち、不朽は永遠の変化に存すという道教の考えが彼らのあらゆる考え方にしみ込んでいた。興味あるところはその過程にあつて行為ではなかつた。真に肝要なるは完成することであつて完成ではなかつた。かくのごとくして人は直ちに天に直面するようになった。新しい意味は次第に生の術にはいつて来た。茶は風流な遊びではなくなつて、自性じしやうりやうげ了解の一つの方法となつて来た。王元之おうげんしは茶を称揚して、直言のごとく靈をあふらせ、その爽そうかい快かいな苦味は善言ぜんげんの余馨よけいを思わせると言つた。蘇東坡そとうばは茶の清淨無垢むくな力について、真に有徳の君子のごとく汚けがすことができないと書いている。仏教徒の間では、道教の教義を多く交じえ

た南方の禅宗が苦心たんせい丹精たんせいの茶の儀式を組み立てた。僧らは菩提ぼだい達磨だるまの像の前に集まつて、ただ一個の碗わんから聖餐せいさんのようにすこぶる儀式張つて茶を飲むのであつた。この禅の儀式こそはついに発達して十五世紀における日本の茶の湯となつた。

不幸にして十三世紀蒙古もうこ種族の突如として起こるにあい、一元げんち朝ようの暴政によつてシナはついに劫掠こうりやく征服せられ、宋代そうだい文化の所産はことごとく破壊せらるるに至つた。十七世紀の中葉に国家再興を企ててシナ本国から起こつた明みんちよう朝は内紛のために悩まされ、次いで十八世紀、シナはふたたび北狄ほくてき満州人の支配するところとなつた。風俗習慣は變じて昔日の面影もなくなつた。粉茶は全く忘れられている。明の一訓くんこ詰がくしや学者は宋代典籍の一に

あげてある茶ちやせん筥の形状を思い起こすに苦しんでいる。現今の茶は葉を碗わんに入れて湯に浸して飲むのである。西洋の諸国が古い喫茶法を知らない理由は、ヨーロッパ人は明朝の末期に茶を知ったばかりであるという事実によって説明ができるのである。

後世のシナ人には、茶は美味な飲料ではあるが理想的なものではない。かの国の長い災禍は人生の意義に対する彼の強い興味を奪ってしまった。彼は現代的になった、すなわち老いて夢よりさめた。彼は詩人や古人の永遠の若さと元気を構成する幻影に対する崇高な信念を失ってしまった。彼は折衷家となって宇宙の因襲を静かに信じてこんなものだと悟っている。天をもてあそぶけれども、へりくだって天を征服しまたはこれを崇拜することはしな

い。彼の葉茶は花のごとき芳香を放ってしばしば驚嘆すべきものがあるが、唐宋時代の茶の湯のロマンスは彼の茶碗には見るこ
とができない。

日本はシナ文化の先蹤を追うて来たのであるから、この茶の三時期をことごとく知っている。早くも七二九年聖武天皇奈良の御殿において百僧に茶を賜うと書物に見えている。茶の葉はたぶん遣唐使によつて輸入せられ、当時流行のたて方でたてられたものである。八〇一年には僧最澄茶の種を携え帰つて叡山にこれを植えた。その後年を経るにしたがつて貴族僧侶の愛好飲料となつたのはいうまでもなく、茶園もたくさんできたということである。宋の茶は一一九一年、南方の禅を研究するため

に渡っていた栄えいせい西さい禅師の帰国とともにわが国に伝わって来た。彼の持ち帰った新種は首尾よく三か所に植え付けられ、その一か所京都に近い宇治うじは、今なお世にもまれなる名茶産地の名をとどめている。南宋の禅は驚くべき迅速をもつて伝播でんぱし、これとともに宋の茶の儀式および茶の理想も広まって行つた。十五世紀のころには將軍足利あしかがよしまさ義政の奨励するところとなり、茶の湯は全く確立して、独立した世俗のことになった。爾来じらい茶道はわが国に全く動かすべからざるものとなっている。後世のシナの煎茶せんちやは、十七世紀中葉以後わが国に知られたばかりであるから、比較的最近に使用し始めたものである。日常の使用には煎茶が粉茶に取つて代わるに至つた、といつても粉茶は今なお茶の中の茶としてそ

の地歩を占めてはいるが。

日本の茶の湯においてこそ始めて茶の理想の極点を見ることが
できるのである。一二八一年蒙古襲来もうこうに当たってわが国は首尾よ
くこれを撃退したために、シナ本国においては蛮族侵入のため不
幸に断たれた宋の文化運動をわれわれは続行することができた。
茶はわれわれにあつては飲む形式の理想化より以上のものとなつ
た、今や茶は生の術に関する宗教である。茶は純粹と都雅を崇拜
すること、すなわち主客協力して、このおりにこの浮世の姿から
無上の幸福を作り出す神聖な儀式を行なう口実となつた。茶室は
寂せき寞ぼくたる人世の荒野における沃地よくちであつた。疲れた旅人はここ
に会して芸術鑑賞という共同の泉かわきから渴をいやすことができた。

茶の湯は、茶、花卉^{かき}、絵画等を主題に仕組まれた即興劇であつた。茶室の調子を破る一点の色もなく、物のリズムをそこなうそよとの音もなく、調和を乱す一指の動きもなく、四囲の統一を破る一言も発せず、すべての行動を単純に自然に行なう——こういうのがすなわち茶の湯の目的であつた。そしていかにも不思議なことには、それがしばしば成功したのであつた。そのすべての背後には微妙な哲理が潜んでいた。茶道は道教の仮りの姿であつた。

第三章 道教と禅道

茶と禅との関係は世間周知のことである。茶の湯は禅の儀式の発達したものであるということはずでに述べたところであるが、道教の始祖老子の名もまた茶の沿革と密接な関係がある。風俗習慣の起源に関するシナの教科書に、客に茶を供するの礼は老子の高弟関尹かんいん（一八）に始まり、函谷関かんこくかんで「老哲人」にまず一碗わんの金色の仙薬せんやくをささげたと書いてある。道教の徒がつとにこの飲料を用いたことを確証するようないろいろな話の真偽をゆつく

りと詮議せんぎするのも価値あることではあるが、それはさておきこ
 である。という道教と禅道とに対する興味は、主としていわゆる茶道とし
 て実際に現われている、人生と芸術に関するそれらの思想に存す
 るのである。

遺憾ながら、道教徒と禅の教義とに關して、外国語で充分に表
 わされているものは今のところ少しもないように思われる。立派
 な試みはいくつかあったが（一九）。

翻訳は常に叛はんぎやく逆ぎやくであつて、明みんちゆう朝の一作家の言のごとく、
 よくいったところであつた。ただ錦にしきの裏を見るに過ぎぬ。縦横の糸は皆あ
 るが色彩、意匠の精妙は見られない。が、要するに容易に説明の
 できるところになんの大教理が存しよう。古いにしえの聖人は決してその

教えに系統をたてなかつた。彼らは逆説をもつてこれを述べた、
というのは半面の真理を伝えんことを恐れたからである。彼らの
始め語るや愚者のごとく終わりに聞く者をして賢ならしめた。老
子みずからその奇警な言でいうに、「下士は道を聞きて大いにこ
れを笑う。笑わざればもつて道となすに足らず。」と。「道」は
文字どおりの意味は「径路」である。それは the Way (行路)、
the Absolute (絶対)、the Law (法則)、Nature (自然)、Supre
me Reason (至理)、the Mode (方式)、等いろいろな訳されて
いる。こういう訳も誤りではない。というのは道教徒のこの言葉
の用法は、問題にしている話題いかによつて異なっているから。
老子みずからこれについて次のように言っている。

物有り混成し、天地に先だつて生ず。寂せきたり寥りようたり。独立して改めず。周行して殆あやうからず。もつて天下の母となすべし。吾われその名を知らず。これを字あざなして道という。強しいてこれが名をなして大という。大を逝せいといい、逝を遠といい、遠を反という。

「道」は「徑路」というよりもむしろ通路にある。宇宙変遷の精神、すなわち新しい形を生み出そうとして絶えずめぐり来る永遠の成長である。「道」は道教徒の愛する象徴りゆうのごとくにすでに反かえり、雲のごとく巻ききたつては解け去る。「道」は大推移とも言うことができよう。主観的に言えば宇宙の気であつて、その絶対は相対的なものである。

まず第一に記憶すべきは、道教はその正統の継承者禅道と同じ

く、南方シナ精神の個人的傾向を表わして、儒教という姿で現われている北方シナの社会的思想とは対比的に相違があるということである。中国はその広漠こうばくたることヨーロッパに比すべく、これを貫流する二大水系によつて分かれた固有の特質を備えている。揚子江ようすこうと黄河こうがはそれぞれ地中海とバルト海である。幾世紀の統一を経た今日でも南方シナはその思想、信仰が北方の同胞と異なること、ラテン民族がチュートン民族とこれを異にすると同様である。古代交通が今日よりもなおいっそう困難であつた時代、特に封建時代においては思想上のこの差異はことに著しいものであつた。一方の美術、詩歌の表わす気分は他方のものと全く異なつたものである。老子とその徒および揚子江畔自然詩人の先

馭者くつげん屈原の思想は、同時代北方作家の無趣味な道德思想とは全く相容あひいれない一種の理想主義である。老子は西暦紀元前四世紀の人である。

道教思想の萌芽ほうがは老ろうたん 出現の遠い以前に見られる。シナ古代の記録、特に易えききよう 経しゅうちよう は老子の思想の先駆をなしている。しかし紀元前十二世紀、周朝しゅうちよう の確立とともに古代シナ文化は隆盛その極に達し、法律慣習が大いに重んぜられたために、個人的思想の発達は長い間阻止せられていた。周崩解して無数の独立国起るにおよび、始めて自由思想がはなやかに咲き誇ることができた。老子そうじ 莊子は共に南方人で新派の大主唱者であつた。一方孔子はその多くの門弟とともに古来の伝統を保守せんと志したものである。

道教を解せんとするには多少儒教の心得がある。この逆も同じである。

道教でいう絶対は相対であることは、すでに述べたところであるが、倫理学においては道教徒は社会の法律道徳を罵倒した。と**ぼとう**いうのは彼らにとつては正邪善悪は単なる相対的の言葉であつたから。定義は常に制限である。「一定」「不変」は単に成長停止を表わす言葉に過ぎない。屈原くつげんいわく「聖人はよく世とともに推移す。」われらの道徳的規範は社会の過去の必要から生まれたものであるが、社会は依然として旧態にとどまるべきものであるか。社会の慣習を守るためには、その国に対して個人を絶えず犠牲にすることを免れぬ。教育はその大迷想を続けんがために一

種の無知を奨励する。人は真に徳行ある人たることを教えられずして行儀正しくせよと教えられる。われらは恐ろしく自己意識が強いから不道徳を行なう。おのれ自身が悪いと知っているから人を決して許さない。他人に真実を語ることを恐れているから良心をはぐくみ、おのれに真実を語るを恐れてうぬぼれを避難所にする。世の中そのものがばかばかしいのにだれがよくまじめでいられよう！ といい、物々交換の精神は至るところに現われている。義だ！ 貞節だ！ などというが、真善の小売りをして悦えつに入っている販売人を見よ。人はいわゆる宗教さえもあがなうことができる。それは実のところたかの知れた倫理学を花や音楽で清めたもの。教会からその付属物を取り去ってみよ、あとに何が残るか。

しかしトラスト（二〇）は不思議なほど繁盛する、値段が途方もなく安いから——天国へ行く切符代の御祈祷ごぎとうも、立派な公民の免許状も。めいめい速く能を隠すがよい。もしほんとうに重宝だと世間へ知れたならば、すぐに競売に出されて最高入札者の手に落とされよう。男も女も何ゆえにかほど自己を広告したいのか。奴隷制度の昔に起源する一種の本能に過ぎないのではないか。

道教思想の雄ゆうこん渾こんなどころは、その後続いて起こった種々の運動を支配したその力にも見られるが、それに劣らず、同時代の思想を切り抜けたその力に存している。秦しんちよう朝ちよう、といえはシナという名もこれに由来しているかの統一時代であるが、その朝を通じて道教は一活動力であった。もし時の余裕があれば、道教がそ

の時代の思想家、数学家、法律家、兵法家、神秘家、鍊金術家および後の江畔自然詩人らに及ぼした影響を注意して見るのも興味あることであろう。また白馬は白く、あるいは堅きがゆえにその実在いかんを疑った実在論者（二一）や、禪門のごとく清浄、絶対について談論した六朝りくちようの清談家も無視することはできぬ。

なかならず、道教がシナ国民性の形成に寄与したところ、「温なること玉のごとし」という慎み、上品の力を与えた点に対して敬意を表すべきである。シナ歴史は、熱心な道教信者が王侯も隠者も等しく彼らの信条の教えに従って、いろいろな興味深い結果をもたらした実例に満ち満ちている。その物語には必ずその持ち前の楽しみもあり教訓もある。逸話、寓言ぐうげん、警句も豊かにある。

う。生きていたことがないから死んだこともないあの愉快な皇帝と、求めても言葉をかわずくらしいの間がらになりたいたいものである。列子とともに風に御してぎよ寂靜無為じやくじようむいを味わうこともできよう、われらみずから風であり、天にも属せず地にも属せず、その中間に住した河上の老人とともに中空にいるものであるから。現今のシナに見る、かの奇怪な、名ばかりの道教においてさえも、他の何道にも見ることできないたくさんのひゆ比喻を楽しむことができるのである。

しかしながら、道教がアジア人の生活に対してなしたおもな貢獻は美学の領域であった。シナの歴史家は道教のことを常に「処世術」と呼んでいる、というのは道教は現在を——われら自身を

取り扱うものであるから。われらこそ神と自然の相会うところ、きのうとあすの分かれるところである。「現在」は移動する「無窮」である。「相対性」の合法的活動範囲である。「相対性」は「安排」を求める。「安排」は「術」である。人生の術はわれらの環境に対して絶えず安排するにある。道教は浮世をこんなものだと思きらめて、儒教徒や仏教徒とは異なつて、この憂うき世の中にも美を見いださうと努めている。宋そう代だいのたとえ話に「三人の酢を味わう者」というのがあるが、三教義の傾向を実に立派に説明している。昔、釈迦しゃかむに牟尼、孔子、老子が人生の象徴酢瓶すかめの前に立つて、おのおの指をつけてそれを味わつた。実際的な孔子はそれが酸すいと知り、仏陀ぶつだはそれを苦にがいと呼び、老子はそれを甘いと

言つた。

道教徒は主張した。もしだれもかれも皆が統一を保つようにするならば人生の喜劇はなおいつそうおもしろくすることができると。物のつりあいを保つて、おのれの地歩を失わず他人に譲ることがが浮世芝居の成功の秘訣ひけつである。われわれはおのれの役を立派に勤めるためには、その芝居全体を知っていなければならぬ。個人を考へるために全体を考へることを忘れてはならない。この事を老子は「虚」という得意の隱喻いんゆで説明している。物の真に肝要なところはただ虚にのみ存すると彼は主張した。たとえば室の本質は、屋根と壁に囲まれた空虚なところに見いだすことができるのであつて、屋根や壁そのものにはない。水さしの役に立つとこ

ろは水を注ぎ込むことのできる空所にあつて、その形状や製品のいかんには存しない。虚はすべてのものを含有するから万能である。虚においてのみ運動が可能となる。おのれを虚にして他を自由に入らすことのできる人は、すべての立場を自由に行動することができるようになるであらう。全体は常に部分を支配することができるのである。

道教徒のこういう考え方は、剣道相撲すもうの理論に至るまで、動作のあらゆる理論に非常な影響を及ぼした。日本の自衛術である柔術はその名を道德経の中の一句に借りている。柔術では無抵抗すなわち虚によつて敵の力を出し尽くそうと努め、一方おのれの力は最後の奮闘に勝利を得るために保存しておく。芸術においても

同一原理の重要なことが暗示の価値によつてわかる。何物かを表わさずにおくところに、見る者はその考えを完成する機会を与えられる。かようにして大傑作は人の心を強くひきつけてついには人が実際にその作品の一部分となるように思われる。虚は美的感情の極致までも入つて満たせとばかりに人を待っている。

生の術をきわめた人は、道教徒の言うところの「士」であつた。士は生まれると夢の国に入る、ただ死に当たつて現実にめざめようとするように。おのが身を世に知れず隠さんために、みずからの聡明そうめいの光を和らげ、「予よとして冬、川を渉わたるがごとく、猶ゆうとして四隣をおそるるがごとく、儼げんとしてそれ客のごとく、渙かんとして冰こおりのまさに积とけんとするがごとく、敦とんとしてそれ樸ぼくのごとく、

曠こうとしてそれ谷のごとく、渾こんとしてそれ濁るがごとし（二二）。「士にとつて人生の三宝は、慈、儉、および「あえて天下の先とならず（二三）。」ということであつた。

さて禪に注意を向けてみると、それは道教の教えを強調していることがわかるであろう。禪は梵語ぼんごの禪那ぜんな（Dhyana）から出た名であつてその意味は静じょうりよ慮りよである。精しょうじん進じん静慮することによつて、自性じしやうりよ了解りよの極致に達することができると禪は主張する。静慮は悟道に入ることのできる六波羅密ろつぱらみつの一つであつて、釈迦牟尼やかむにはその後年の教えにおいて、特にこの方法を力説し、六則をその高弟迦葉かしやうに伝えた。と禪宗徒は確言している。かれらの言は、い伝えによれば、禪の始祖迦葉はその奥義を阿難陀あなんだに伝え、阿難

陀から順次に祖師相伝えてついに第二十八祖菩提達磨ぼだいだるまに至った。

菩提達磨は六世紀の前半に北シナに渡つてシナ禅宗の第一祖となつた。これらの祖師やその教理の歴史については不確実などころが多い。禅を哲学的に見れば昔の禅学は一方において那伽闍刺樹ながあらじゆ那ゆな(二四)のインド否定論に似ており、また他方においては商羯羅阿闍梨からあじやりの組み立てた無明觀むみょう(二六)に似たところがあるように思われる。今日われらの知っているとおりの禅の教理は南方禅(南方シナに勢力があつたことからそういわれる)の開山シナの第六祖慧能えのう(六三七―七一三)が始めて説いたに違いない。慧能の後、ほどなく馬祖大師ばそ(七八八滅)これを継いで禅を中国人の生活における一活動勢力に作りあげた。馬祖の弟子百丈でしひやくじょう(七

一九一八一四）は禅宗叢林そうりんを開創し、禅林清規ぜんりんしんぎを制定した。馬祖の時代以後の禅宗の問答を見ると、揚子江岸精神ようすこうがんの影響をこうむって、昔のインド理想主義とはきわ立って違ったシナ固有の考え方を増していることがわかる。いかほど宗派的精神の誇りが強くて、そうではないといったところで、南方禅が老子や清談家の教えに似ていることを感じないわけにはいかない。道德経の中にすでに精神集中の重要なことや氣息を適当に調節することを述べている——これは禅定に入るに必要な欠くべからざる要件である。道德経の良注釈あの或るものは禅学者によって書かれたものである。

禅道は道教と同じく相対を崇拜するものである。ある禅師は禅

を定義して南天に北極星を識しるの術といっている。真理は反対なものを出得することによつてのみ達せられる。さらに禅道は道教と同じく個性主義を強く唱道した。われらみずからの精神の働きに関係しないものはいっさい実在ではない。六祖慧能えのうかつて二僧が風に翻る塔上の幡ぼんを見て対論するのを見た。「一はいわく幡動くと。一はいわく風動くと。」しかし、慧能は彼らに説明して言った、これ風の動くにあらざまた幡ぼんの動くにもあらざただ彼らみずからの心中のある物の動くなり。百丈が一人の弟子と森の中を歩いていると一匹うさぎの兎が彼らの近寄つたのを知つて疾走し去つた。「なぜ兎はおまえから逃げ去つたのか。」と百丈が尋ねると、「私を恐れてでしょう。」と答えた。祖師は言った、「そうでは

ない、おまえに残忍性があるからだ。」と。この対話は道教の徒
 莊子の話を思い起させる。ある日莊子友と濠梁ごうりようのほとりに遊
 んだ。莊子いわく「魚じようぎよいで遊しようようびて従し容したり。これ魚の
 楽しむなり。」と。その友彼に答えていわく「子は魚にあらず。
 いずくんぞ魚の楽しきを知らん。」と。「子は我れにあらず、い
 ずくんぞわが魚の楽しきを知らざるを知らん。」と莊子は答えた。

禅は正統の仏道の教えとしばしば相反した、ちようど道教が儒
 教と相反したように。禅門の徒の先驗的洞察どうさつに対しては言語は
 ただ思想の妨害となるものであった。仏典のあらん限りの力をも
 つてしてもただ個人的思索の注釈に過ぎないのである。禅門の徒
 は事物の内面的精神と直接交通しようと志し、その外面的の付属

物はただ真理に到達する阻害と見なした。この絶対を愛する精神こそは禅門の徒をして古典仏教派の精巧な彩色画よりも墨絵の略画を選ばしめるに至ったのである。禅学徒の中には、偶像や象徴によらないでおのれの中に仏陀ぶつだを認めようと努めた結果、偶像破壊主義者になったものさえある。丹霞和尚たんかおしょうは大寒の日に木仏を取ってこれを焚たいたという話がある。かたわらにいた人は非常に恐れて言った、「なんとまあもつたいない！」と。和尚は落ち着き払って答えた、「わしは仏様を焼いて、お前さんたちのありがたがっているお舍利しやりを取るのだ。」「木仏の頭からお舍利が出てたまるものですか。」とつつけんどんな受け答えに、丹霞和尚がこたえて言った、「もし、お舍利の出ない仏様なら、何ももつた

いないことはないではないか。」そう言つて振り向いてたき火にからだをあたためた。

禅の東洋思想に対する特殊な寄与は、この現世の事をも後生ごしやうのことと同じように重く認めたことである。禅の主張によれば、事物の大相対性から見れば大と小との区別はなく、一原子の中にも大宇宙と等しい可能性がある。極致を求めんとする者はおのれみずからの生活の中に靈光の反映を発見しなければならぬ。禅林の組織はこういう見地から非常に意味深いものであつた。祖師を除いて禅僧はことごとく禅林の世話に関する何か特別の仕事に課せられた。そして妙なことには新参者には比較的軽い務めを与えられたが、非常に立派な修行を積んだ僧には比較的うるさい下賤げせん

な仕事が課せられた。こういう勤めが禅修行の一部をなしたものであつて、いかなる些ささい細な行動も絶対完全に行なわなければならぬのであつた。こういうふうにして、庭の草をむしりながらも、蕪菁かぶらを切りながらも、またはお茶をくみながらも、いくつもいくつも重要な論議が次から次へと行なわれた。茶道いつさいの理想は、人生の些事さじの中にでも偉大を考えると、この禅の考えから出たものである。道教は審美的理想の基礎を与え、禅はこれを実際的なものとした。

第四章 茶室

石造や煉瓦造り建築の伝統によつて育てられた欧州建築家の目には、木材や竹を用いるわが日本式建築法は建築としての部類に入れる価値はほとんどないように思われる。ある相当立派な西洋建築の研究家がわが国の大社寺の実に完備していることを認め、これを称揚したのは全くほんの最近のことである。わが国で一流の建築についてこういう事情であるから、西洋とは全く趣を異にする茶室の微妙な美しさ、その建築の原理および裝飾が門外漢に

充分にわかろうとはまず予期できないことである。

茶室（数寄屋^{すきや}）は単なる小家で、それ以外のものをてらうものではない、いわゆる茅屋^{ぼうおく}に過ぎない。数寄屋の原義は「好き家」である。後になっていろいろな宗匠が茶室に対するそれぞれの考えに従っているいろいろな漢字を置き換えた、そして数寄屋という語は「空^すき家」または「数奇家」の意味にもなる。それは詩趣を宿すための仮りの住み家であるからには「好^すき家」である。さしあたって、ある美的必要を満たすためにおく物のほかは、いつさいの装飾を欠くからには「空^すき家」である。それは「不完全崇拜」にささげられ、故意に何かを仕上げずにおいて、想像の働きにこれを完成させるからには「数奇家」である。茶道の理想は十六世

紀以来わが建築術に非常な影響を及ぼしたので、今日、日本の普通の家屋の内部はその装飾の配合が極端に簡素なため、外国人にはほとんど没趣味なものに見える。

始めて独立した茶室を建てたのはせん千宗易のそうえき、すなわち後に利

きゆう

休きゆうという名で普通に知られている大宗匠で、彼は十六世紀太

たいこ

閣うひでよし秀吉うひでよしの愛顧をこうむり、茶の湯の儀式を定めてこれを完成

の域に達せしめた。茶室の広さはその以前に十五世紀の有名な宗

じょうおう

匠紹じょうおう 鷗お によつて定められていた。初期の茶室はただ普通の客

びようぶ

間の一部分を茶の会のために屏風びようぶで仕切つたものであつた。そ

の仕切つた部分は「かこい」と呼ばれた。その名は、家の中に作

られていて独立した建物ではない茶室へ今もなお用いられている。

数寄屋は、「グレイスの神よりは多く、ミューズの神よりは少ない。」という句を思い出させるような五人しかはいれないしくみの茶室本部と、茶器を持ち込む前に洗ってそろえておく控えの間みずや（水屋）と、客が茶室へはいれと呼ばれるまで待つている玄関まちあい（待合）と、待合と茶室を連絡している庭の小道（露地ろじ）とから成っている。茶室は見たところなんの印象も与えない。それは日本のいちばん狭い家よりも狭い。それにその建築に用いられている材料は、清貧を思わせるようにできている。しかしこれはすべて深遠な芸術的思慮の結果であつて、細部に至るまで、立派な宮殿寺院を建てるに費やす以上の周到な注意をもつて細工が施されているということ忘れてはならない。よい茶室は普通の邸宅

以上に費用がかかる、というのはその細工はもちろんその材料の選択に多大の注意と綿密を要するから。実際茶人に用いられる大工は、職人の中でも特殊な、非常に立派な部類を成している。彼らの仕事は漆器家具匠の仕事にも劣らぬ精巧なものであるから。

茶室はただに西洋のいずれの建築物とも異なるのみならず、日本そのものの古代建築とも著しい対照をなしている。わが国古代の立派な建築物は宗教に關係あるものもないものも、その大きさだけから言っても侮りがたいものであった。数世紀の間不幸な火災を免れて来たわづかの建築物は、今なおその装飾の壮大華麗によつて、人に畏敬いけいの念をおこさせる力がある。直径二尺から三尺、高さ三十尺から四十尺の巨柱は、複雑な腕木うでぎの網状細工によつて、

斜めの瓦屋根かわらやねの重みにうなつている巨大な梁はりをささえていた。建築の材料や方法は、火に対しては弱いけれども地震には強いということがわかった。そしてわが国の気候によく適していた。法隆寺うりゆうじの金堂こんどうや薬師寺やくしじの塔は木造建築の耐久性を示す注目すべき実例である。これらの建物は十二世紀の間事実上そのまま保全せられていた。古い宮殿や寺の内部は惜しげもなく裝飾を施されていた。十世紀にできた宇治うじの鳳凰堂ほうおうどうには今もなお昔の壁画彫刻の遺物はもとより、丹精たんせいをこらした天蓋てんがい、金を蒔まき鏡や真珠をちりばめた廟蓋びやうがいを見ることができ、後になつて、日光や京都二条の城においては、アラビア式またはムーア式華麗をつくした力作にも等しいような色彩の美や精巧をきわめたたくさん

の装飾のために、建築構造の美が犠牲にせられているのを見る。

茶室の簡素清浄は禅院の競いからおこったものである。禅院は他の宗派のものと異なつてただ僧の住所として作られている。その会堂は礼拝巡礼の場所ではなくて、禅修行者が会合して討論し黙想する道場である。その室は、中央の壁の凹所おうしよ、仏壇の後ろに禅宗の開祖菩提達磨ぼだいだるまの像か、または祖師迦葉かしようと阿難陀あなんだをしたがえた釈迦牟尼しやかむにの像があるのを除いてはなんの飾りもない。仏壇には、これら聖者の禅に対する貢献を記念して香華こうげがささげてある。茶の湯の基をなしたものはほかではない、菩提達磨の像の前で同じ碗わんから次々に茶を喫のむという禅僧たちの始めた儀式であつたといふことはすでに述べたところである。が、さらにここに付

言してよかろうと思われれることは禅院の仏壇は、床の間——絵や花を置いて客を教化する日本間の上座——の原型であつたということである。

わが国の偉い茶人は皆禅を修めた人であつた。そして禅の精神を現実生活の中へ入れようと企てた。こういうわけで茶室は茶の湯の他の設備と同様に禅の教義を多く反映している。正統の茶室の広さは四畳半で維摩ゆいまの経きょうもん文ぶんの一節によつて定められている。その興味ある著作において、馥柯羅摩訶秩多びからまかちつた（二七）は文珠師利菩薩ぼんじゆしりと八万四千の仏陀ぶつだの弟子でしをこの狭い室に迎えている。これすなわち真まことに覺さとつた者には一切いっさい皆か空くうという理論りろんに基づくたとえ話である。さらに待合から茶室に通ずる露地は默想の第一階段、

すなわち自己照明に達する通路を意味していた。露地は外界との関係を断つて、茶室そのものにおいて美的趣味を十分に味わう助けとなるように、新しい感情を起こすためのものであつた。この庭徑を踏んだことのある人は、常緑樹の薄明に、下には松葉の散りしくところを、調和ある不ぞろいな庭石の上を渡つて、苔こけむした石燈籠いしどうろうのかたわらを過ぎる時、わが心のいかに高められたかを必ず思い出すであらう。たとえ都市のまん中にいてもなお、あたかも文明の雑踏や塵ちりを離れた森の中にいるような感がする。こういう静寂純潔の効果を生ぜしめた茶人の巧みは実に偉いものであつた。露地を通り過ぎる時に起こすべき感情の性質は茶人によつていろいろ違つていた。利休のような人たちは全くの静寂を目

的とし、露地を作るの奥意は次の古歌の中にこもっていると主張した（二八）。

見渡せば花ももみじもなかりけり

浦のとまやの秋の夕暮れ（二九）

その他小堀遠州こほりえんしゅうのような人々はまた別の効果を求めた。遠

州は庭径の着想は次の句の中にあると言った。

夕月夜海ゆうづくよすこしある木の間こまかな（三〇）

彼の意味を推測するのは難くない。彼は、影のような過去の夢の中になおさまよいながらも、やわらかい靈光の無我の境地に浸つて、渺びようぼう茫たるかなたに横たわる自由をあこがれる新たに目ざめた心境をおこそうと思つた。

こういう心持ちで客は黙々としてその聖堂に近づいて行く。そしてもし武士ならばその剣を軒下の刀架とうかにかけておく、茶室は至極平和の家であるから。それから客は低くかがんで、高さ三尺ぐらゐの狭い入り口「にじり口」からにじつてはいる。この動作は、たつと身貴きも卑しきも同様にすべての客に負わされる義務であつて、人に謙讓を教え込むためのものであつた。席次は待合で休んでゐる間に定まつてゐるので、客は一人ずつ静かにはいつてその席につき、まず床の間の絵または生花に敬意を表する。主人は、客が皆着席して部屋へやが静まりきり、茶ちや釜がまにたぎる湯の音を除いては、何一つ静けさを破るものもないようになって、始めてはいつてくる。茶釜は美しい音をたてて鳴る。特殊のメロデーを出すよう

に茶釜の底に鉄片が並べてあるから。これを聞けば、雲に包まれた滝の響きか岩に砕くる遠海の音か竹林を払う雨風か、それともどこか遠き丘の上の松しょうらい籟かとも思われる。

日中でも室内の光線は和らげられている。傾斜した屋根のある低いひさしは日光を少ししか入れないから。天井から床に至るまですべての物が落ち着いた色合である。客みずからも注意して目立たぬ着物を選んでゐる。古めかしい和らかさがすべての物に行き渡っている。ただ清浄無垢むくな白い新しい茶ちや筥せんと麻ふきんが著しい対比をなしているのを除いては、新しく得られたらしい物はすべて厳禁せられている。茶室や茶道具がいかにも色あせて見えなくてもすべての物が全く清潔である。部屋へやの最も暗いすみにさえ塵ちり

一本も見られない。もしあるようならばその主人は茶人とはいわれないのである。茶人に第一必要な条件の一は掃き、ふき清め、洗うことに関する知識である、払い清めるには術を要するから。金属細工はオランダの主婦のように無遠慮にやつきとなつてはたいてはならない。花瓶かびんからしたたる水はぬぐい去るを要しない、それは露を連想させ、涼味を覚えさせるから。

これに関連して、茶人たちのいだいていた清潔という考えをよく説明している利休についての話がある。利休はその子紹安じょうあんが露地を掃除そうじし水をまくのを見ていた。紹安が掃除を終えた時利休は「まだ充分でない。」と言つてもう一度しなおすように命じた。いやいやながら一時間もかかってからむすこは父に向かつて

言つた、「おとうさん、もう何もすることはありません。庭石は三度洗い石燈籠いしどうろうや庭木にはよく水をまき蘚苔こけは生き生きした緑色に輝いています。地面には小枝一本も木の葉一枚もありません。」

「ばか者、露地の掃除はそんなふうにするものではない。」

と言つてその茶人はしかつた。こう言つて利休は庭におり立ち一樹を揺すつて、庭一面に秋の錦にしきを片々と黄金、紅の木の葉を散りしかせた。利休の求めたものは清潔のみではなくて美と自然とであつた。

「好き家」という名はある個人の芸術的要求にかなうように作られた建物という意味を含んでいる。茶室は茶人のために作ったものであつて茶人は茶室のためのものではない。それは子孫のため

に作ったのではないから暫定的である。人は各自独立の家を持つべきであるという考えは日本民族古来の習慣に基づいたもので、神道の迷信的習慣の定めによれば、いずれの家もその家長が死ぬと引き払うことになっている。この習慣はたぶんあるわからない衛生上の理由もあつてのことかもしれない。また別に昔の習慣として新婚の夫婦には新築の家を与えるということもあつた。こういう習慣のために古代の皇居は非常にしばしば次から次へとうつされた。伊勢いせの大たい廟びょうを二十年ごとに再築するのは古いにしえの儀式の今日なお行なわれている一例である。こういう習慣を守るのは組み立て取りこわしの容易なわが国の木造建築のようなある建築様式においてのみ可能であつた。煉瓦れんが石材を用いるやや永続的な様

式は移動できないようにしたであろう、奈良朝以後シナの鞏こ固な重々しい木造建築を採用するに及んで實際移動不可能になつたように。

しかしながら十五世紀禪の個性主義が勢力を得るにつれて、その古い考えは茶室に連関して考えられ、これにある深い意味がしみこんで来た。禪は仏教の有為ういてんぺん轉變の説と精神が物質を支配すべきであるというその要求によつて家をば身を入れるただ仮りの宿と認めた。その身とてもただ荒野にたてた仮りの小屋、あたりにはえた草を結んだか弱い雨露しのぎ——この草の結びが解ける時はまたもとの野原に立ちかえる。茶室において草ぶきの屋根、細い柱の弱々しさ、竹のささえの軽かろやかさ、さてはありふれた材料

を用いて一見いかにも無頓着らしいところにも世の無常が感ぜられる。常住は、ただこの単純な四囲の事物の中に宿されていて風流の微光で物を美化する精神に存している。

茶室はある個人的趣味に適するように建てらるべきだということとは、芸術における最も重要な原理を実行することである。芸術が十分に味わわれるためにはその同時代の生活に合っていないければならぬ。それは後世の要求を無視せよというのではなくて、現在をなおいつそう楽しむことを努むべきだというのである。また過去の創作物を無視せよというのではなくて、それをわれらの自覚の中に同化せよというのである。伝統や型式に屈従することは、建築に個性の表われるのを妨げるものである。現在日本に見るよ

うな洋式建築の無分別な模倣を見てはただ涙を注ぐほかはない。われわれは不思議に思う、最も進歩的な西洋諸国の間に何ゆえに建築がかくも斬^{ざん}新^{しん}を欠いているのか、かくも古くさい様式の反復に満ちているのかと。たぶん今芸術の民本主義の時代を経過しつつ、一方にある君主らしい支配者が出現して新たな王朝をおこすのを待っているのである。願わくは古人を憬慕^{けいぼ}することはいっそうせつに、かれらに模倣することはますます少なからんことを！ ギリシャ国民の偉大であったのは決して古物に求めなかつたからであると伝えられている。

「空^すき家」という言葉は道教の万物包^{ほう}涵^{かん}の説を伝えるほかに、裝飾精神の変化を絶えず必要とする考えを含んでいる。茶室はた

だ暫時美的感情を満足さすためにおかれる物を除いては、全く空虚である。何か特殊な美術品を臨時に持ち込む、そしてその他の物はすべて主調の美しさを増すように選択配合せられるのである。人はいろいろな音楽を同時に聞くことはできぬ、美しいものの真の理解はただある中心点に注意を集中することによつてのみできるのであるから。かくのごとくわが茶室の装飾法は、現今西洋に行なわれている装飾法、すなわち屋内がしばしば博物館に変わつていゝような装飾法とは趣を異にしていることがわかるだろう。装飾の単純、装飾法のしばしば変化するのになれている日本人の目には、こつとうひん 骨董品のおびただしい陳列で永久的に満たされている西洋の屋内は、単に俗な富を誇示しているに過ぎな

い感を与える。一個の傑作品でも絶えずながめて楽しむには多大の鑑賞力を要する。してみれば欧米の家庭にしばしば見るような色彩形状の混沌こんとんたる間に毎日毎日生きている人たちの風雅な心はさぞかし際限もなく深いものであろう。

「数寄屋」はわが装飾法の他の方面を連想させる。日本の美術品が均斉を欠いていることは西洋批評家のしばしば述べたところである。これもまた禅を通じて道教の理想の現われた結果である。儒教の根深い両元主義も、北方仏教の三尊崇拝も、決して均斉の表現に反対したものではなかった。実際、もしシナ古代の青銅器具または唐代および奈良なら時代の宗教的美術品を研究してみれば均斉を得るために不断の努力をしたことが認められるであろう。わ

が国の古典的屋内装飾はその配合が全く均斉を保っていた。しかしながら道教や禅の「完全」という概念は別のものであった。彼らの哲学の動的な性質は完全そのものよりも、完全を求むる手続きに重きをおいた。真の美はただ「不完全」を心の中に完成する人によつてのみ見いだされる。人生と芸術の力強いところはその発達の可能性に存した。茶室においては、自己に関連して心の中に全効果を完成することが客各自に任されている。禅の考え方が世間一般の思考形式となつて以来、極東の美術は均斉ということとは完成を表わすのみならず重複を表わすものとしてことさらに避けていた。意匠の均等は想像の清新を全く破壊するものと考えられていた。このゆえに人物よりも山水花鳥を画題として好んで用

いるようになった。人物は見る人みずからの姿として現われているのであるから。実際われわれは往々あまりに自己をあらわし過ぎて困る、そしてわれわれは虚栄心があるにもかかわらず自愛さえも単調になりがちである。茶室においては重複の恐れが絶えずある。室の装飾に用いる種々な物は色彩意匠の重複しないように選ばなければならぬ。生花があれば草花の絵は許されぬ。丸い釜かまを用いれば水さしは角張っていないなければならぬ。黒釉くろゆうわぐすり葉かの茶わんは黒塗りの茶入れとともに用いてはならぬ。香炉や花瓶かびんを床の間にするにも、その場所を二等分してはならないから、ちょうどそのまん中に置かぬよう注意せねばならぬ。少しでも室内の単調の気味を破るために、床の間の柱は他の柱とは異なった材木

を用いねばならぬ。

この点においてもまた日本の室内装飾法は西洋の壁炉やその他の場所に物が均等に並べてある装飾法と異なっている。西洋の家ではわれわれから見れば無用の重複と思われるものにしぼしぼ出くわすことがある。背後からその人の全身像がじつとこちらを見ている人と対談するのはつらいことである。肖像の人か、語っている人か、いずれが真のその人であろうかといふかり、その一方はにせ物に違いないという妙な確信をいだいてくる。お祝いの饗き
ようえん宴えんに連なりながら食堂の壁に描かれたたくさんのものをつくづくながめて、ひそかに消化の傷害をおこしたことは幾度も幾度もある。何ゆえにこのような遊獵の獲物を描いたものや魚類果くだも

物の丹精たんせいこめた彫刻をおくのであるか。何ゆえに家伝の金銀食器を取り出して、かつてそれを用いて食事をし今はなき人を思い出させるのであるか。

茶室は簡素にして俗を離れているから真に外界のわずらわしさを遠ざかった聖堂である。ただ茶室においてのみ人は落ち着いて美の崇拜に身をささげることができる。十六世紀日本の改造統一にあずかった政治家やたけき武士ものふにとって茶室はありがたい休養所となった。十七世紀徳川治世のきびしい儀式固守主義の発達した後は、茶室は芸術的精神と自由に交通する唯一の機会を与えてくれた。偉大なる芸術品の前には大名も武士も平民も差別はなかった。今日は工業主義のために真に風流を楽しむことは世界至

るところますます困難になって行く。われわれは今までよりもい
つそう茶室を必要とするのではなからうか。

第五章 芸術鑑賞

諸君は「琴ならし」という道教徒の物語を聞いたことがありませんか。

大昔、りゆうもん 竜門のきやうこく 峽谷に、これぞ真の森の王と思われふる古るざり 桐があつた。頭はもたげて星と語り、根は深く地中におろして、その青銅色のとぐろ巻きは、地下に眠るぎんりゆう 銀竜のそれとからまようじゆつしや 妖術者がこの木を切つて不がんこ 思議な琴をこしらえた。そしてその頑固な精を和らげるには、た

だ楽聖の手にまつよりほかはなかつた。長い間その楽器は皇帝に秘蔵せられていたが、その弦から妙たえなる音をひき出そうと名手がかわるがわる努力してもそのかいは全くなかつた。彼らのあらゆる努力に答えるものはただ軽侮の音、彼らのよろこんで歌おうとする歌とは不調和な琴の音ばかりであつた。

ついに伯牙はくがという琴の名手が現われた。御ぎよしがたい馬をしずめようとする人のごとく、彼はやさしく琴を撫ぶし、静かに弦をたたいた。自然と四季を歌い、高山を歌い、流水を歌えば、その古桐の追憶はすべて呼び起こされた。再び和らかい春風はその枝の間に戯れた。峽きょう谷こくをおどりながら下つてゆく若い奔流は、つばみの花に向かつて笑つた。たちまち聞こえるのは夢のごとき、数

知れぬ夏の虫の声、雨のばらばらと和らかに落ちる音、悲しげな
 郭かつこう公の声。聞け！ 虎とらうそぶいて、谷これにこたえている。秋
 の曲を奏すれば、物さびしき夜に、劍つるぎのごとき鋭い月は、霜のお
 く草葉に輝いている。冬の曲となれば、雪空に白鳥の群れ渦うずま巻き、
 霰あられはばらばらと、嬉き々として枝を打つ。

次に伯牙は調べを変えて恋を歌った。森は深く思案にくれてい
 る熱烈な恋人のようにゆらいだ。空にはつんとした乙女おとめのような
 冴さえた美しい雲が飛んだ。しかし失望のような黒い長い影を地上
 にひいて過ぎて行つた。さらに調べを変えて戦いを歌い、劍戟けんげき
 の響きや駒こまの蹄ひづめの音を歌った。すると、琴中に竜りゅうもん門の暴風雨
 起こり、竜は電光に乗じ、轟ごうごう々たる雪崩なだれは山々に鳴り渡つた。

帝王は狂喜して、伯牙に彼の成功の秘訣ひけつの存するところを尋ねた。彼は答えて言った、「陛下、他の人々は自己の事ばかり歌ったから失敗したのであります。私は琴にその樂想を選ぶことを任せて、琴が伯牙か伯牙が琴か、ほんとうに自分にもわかりませんでした。」と。

この物語は芸術鑑賞の極意ごくいをよく説明している。傑作というものはわれわれの心琴にかなでる一種の交響樂である。眞の芸術は伯牙であり、われわれは竜門の琴である。美の靈手に触れる時、わが心琴の神秘の弦は目ざめ、われわれはこれに呼応して振動し、肉をおどらせ血をわかす。心は心と語る。無言のものに耳を傾け、見えないものを凝視する。名匠はわれわれの知らぬ調べを呼び起

こす。長く忘れていた追憶はすべて新しい意味をもつてかえつて来る。恐怖におさえられていた希望や、認める勇気のなかつた憧憬うけいが、榮はえばえと現われて来る。わが心は画家の絵の具を塗る画布である。その色素はわれわれの感情である。その濃淡の配合は、喜びの光であり悲しみの影である。われわれは傑作によつて存するごとく、傑作はわれわれによつて存する。

美術鑑賞に必要な同情ある心の交通は、互譲の精神によらなければならぬ。美術家は通信を伝える道を心得ていなければならぬように、観覧者は通信を受けるに適當な態度を養わなければならぬ。宗匠小堀こぼりえんしゅう遠州は、みずから大名でありながら、次のような忘れがたい言葉を残している。「偉大な絵画に接するに

は、王侯に接するごとくせよ。」傑作を理解しようとするには、その前に身を低うして息を殺し、一言一句も聞きもらさじと待っていないければならない。宋そうのある有名な批評家が、非常におもしろい自白をしている。「若いころには、おのが好む絵を描く名人を称揚したが、鑑識力の熟するに従つて、おのが好みに適するよ
うに、名人たちが選んだ絵を好むおのれを称した。」現今、名人の気分を骨を折つて研究する者が実に少ないのは、誠に歎かわしいことである。われわれは、手のつけようのない無知のために、この造作ぞうさのない礼儀を尽くすことをいとう。こうして、眼前に広げられた美の響きよう 応おうにもあずからないことがしばしばある。名人にはいつでもごちそうの用意があるが、われわれはただみずか

ら味わう力がないために飢えている。

同情ある人に対しては、傑作が生きた実在となり、僚友関係のよしみでこれに引きつけられるこちがする。名人は不朽である。というのは、その愛もその憂うれいも、幾度も繰り返してわれわれの心に生き残つて行くから。われわれの心に訴えるものは、伎倆ぎりようというよりは精神であり、技術というよりも人物である。呼び声こゑが人間味のあるものであれば、それだけにわれわれの応答は衷心から出て来る。名人とわれわれの間に、この内密の默契があればこそ詩や小説を読んで、その主人公とともに苦しみ共に喜ぶのである。わが国の沙翁しゃおう近松ちかまつは劇作の第一原則の一つとして、見る人に作者の秘密を打ち明かす事が重要であると定めた。弟子でした

ちの中には幾人も、脚本をさし出して彼の称賛を得ようとした者があつたが、その中で彼がおもしろいと思つたのはただ一つであつた。それは、ふたごの兄弟が、人違いのために苦しむという

『まちがいつづき』に多少似ている脚本であつた。近松が言うには、「これこそ、劇本来の精神をそなえている。というのは、これは見る人を考えに入れていゝから公衆が役者よりも多く知るところを許されている。公衆は誤りの因を知つていて、哀れにも、罪もなく運命の手におちて行く舞台の上の人々を哀れむ。」と。

大家は、東西両洋ともに、見る人を腹心の友とする手段として、暗示の価値を決して忘れなかつた。傑作をうちながめる人たれか心に浮かぶ綿々たる無限の思いに、畏敬いけいの念をおこさない者があ

ろう。傑作はすべて、いかにも親しみあり、肝胆相照らして
ではないか。これにひきかえ、現代の平凡な作品はいかにも冷や
やかなものではないか。前者においては、作者の心のあたたかい
流露を感じ、後者においては、ただ形式的の会釈を感じるのみで
ある。現代人は、技術に没頭して、おのれの域を脱することはま
れである。竜門りゅうもんの琴を、なんのかいもなくかき鳴らそうとし
た楽人のごとく、ただおのれを歌うのみであるから、その作品は、
科学には近かろうけれども、人情を離れること遠いのである。日
本の古い俚諺りげんに「見えはる男には惚ほれられぬ。」というのがある。
そのわけは、そういう男の心には、愛を注いで満たすべきさま
がないからである。芸術においてもこれと等しく、虚栄は芸術家

公衆いずれにおいても同情心を害することはなほだしいものである。

芸術において、類縁の精神が合一するほど世にも神聖なものはない。その会するやたちまちにして芸術愛好者は自己を超越する。彼は存在すると同時に存在しない。彼は永劫えいこうを瞥見べっけんするけれども、目には舌なく、言葉をもつてその喜びを声に表わすことはできない。彼の精神は、物質の束縛を脱して、物のリズムによって動いている。かくのごとくして芸術は宗教に近づいて人間をけだかくするものである。これによつてこそ傑作は神聖なものとなるのである。昔日本人が大芸術家の作品を崇敬したことは非常なものであつた。茶人たちはその秘蔵の作品を守るに、宗教的秘密

をもつてしたから、御神龕ごしんかん（絹地の包みで、その中へやわらかに包んで奥の院が納めてある）まで達するには、幾重にもある箱をすつかり開かねばならないことがしばしばあった。その作品が人目にふれることはきわめてまれで、しかも奥義を授かった人にもみ限られていた。

茶道の盛んであつた時代においては、太閤たいこうの諸将は戦勝の褒ほ美うびとして、広大な領地を賜わるよりも、珍しい美術品を贈られることを、いつそう満足に思つたものであつた。わが国で人気ある劇の中には、有名な傑作の喪失回復に基づいて書いたものが多い。たとえば、ある劇にこういう話がある。細川侯ほそかわこうの御殿には雪せつそ村むらの描いた有名な達磨だるまがあつたが、その御殿が、守りの侍の怠

慢から火災にかかった。侍は万事を賭して、この宝を救い出そうと決心して、燃える御殿に飛び入って、例の掛け物をつかんだ、が見ればはや、火炎にさえぎられて、のがれる道はなかったのである。彼は、ただその絵のこのみを心にかけて、剣をもっておのが肉を切り開き、裂いた袖そでに雪村を包んで、大きく開いた傷口にこれをつっ込んだ。火事はずいにしてしまった。煙る余燼よじんの中に、半焼の死骸しがいがあった。その中に、火の災いをこうむらないで、例の宝物は納まっていた。実に身の毛もよだつ物語であるが、これによって、信頼を受けた侍の忠節はもちろんのこと、わが国人がいかに傑作を重んじるかということが説明される。

しかしながら、美術の価値はただそれがわれわれに語る程度に

よるものであることを忘れてはならない。その言葉は、もしわれわれの同情が普遍的であつたならば、普遍的なものであるかもしれない。が、われわれの限定せられた性質、代々相伝の本性はもちろんのこと、慣例、因襲の力は美術鑑賞力の範囲を制限するものである。われらの個性さえも、ある意味においてわれわれの理解力に制限を設けるものである。そして、われらの審美的個性は、過去の創作品の中に自己の類縁を求め。もつとも、修養によつて美術鑑賞力は増大するものであつて、われわれはこれまでは認められなかつた多くの美の表現を味わうことができるようになるものである。が、ひつきよう畢 竟 するところ、われわれは万有の中に自分の姿を見るに過ぎないのである。すなわちわれら特有の性質が

われらの理解方式を定めるのである。茶人たちは全く各人個々の鑑賞力の及ぶ範囲内の物のみを収集した。

これに連関して小堀遠州に関する話を思い出す。遠州はかつてその門人たちから、彼が収集する物の好みに現われている立派な趣味を、お世辞を言つてほめられた。「どのお品も、実に立派なもので、人皆嘆賞おくあたわざるところであります。これによつて先生は、利休にもまさる趣味をお持ちになつてゐることがわかります。というのは、利休の集めた物は、ただ千人に一人しか真にわかるものがいなかつたのでありますから。」と。遠州は歎じて、「これはただいかにも自分が凡俗であることを証するのみである。偉い利休は、自分だけにおもしろいと思われる物をのみ愛

好する勇氣があつたのだ。しかるに私は、知らず知らず一般の人の趣味にこびている。實際、利休は千人に一人の宗匠であつた。」と答えた。

実に遺憾にたえないことには、現今美術に対する表面的の熱狂は、真の感じに根拠をおいていない。われわれのこの民本主義の時代においては、人は自己の感情には無頓着むとんじやくに世間一般から最も良いと考えられている物を得ようとかしましく騒ぐ。高雅なものではなくて、高価なものを欲し、美しいものではなくて、流行品を欲するのである。一般民衆にとつては、彼らみずからの工業主義の尊い産物である絵入りの定期刊行物をながめるほうが、彼らが感心したふりをしてしている初期のイタリア作品や、足利時代あしかが

の傑作よりも美術鑑賞の糧かてとしてもつと消化しやすいであろう。彼らにとつては、作品の良否よりも美術家の名が重要である。数世紀前、シナのある批評家の歎じたごとく、世人は耳によつて絵画を批評する。今日いずれの方面を見ても、擬古典的嫌悪けんおを感じるのは、すなわちこの眞の鑑賞力の欠けているためである。

なお一つ一般に誤っていることは、美術と考古学の混同である。古物から生ずる崇敬の念は、人間の性質の中で最もよい特性であつて、いつそうこれを涵養かんようしたいものである。古の大家いにしえは、後世啓発の道を開いたことに対して、当然尊敬をうくべきである。彼らは幾世紀の批評を経て、無傷のままわれわれの時代に至り、今もなお光栄を荷にのうているというだけで、われわれは彼らに敬

意を表している。が、もしわれわれが、彼らの偉業を単に年代の古きゆえをもつて尊んだとしたならば、それは実に愚かなことである。しかもわれわれは、自己の歴史的同情心が、審美的眼識を無視するままに許している。美術家が無事に墳墓におさめられると、われわれは称賛の花を手向けるたむのである。進化論の盛んであった十九世紀には、人類のことを考えて個人を忘れる習慣が作られた。収集家は一時期あるいは一派を説明する資料を得んことを切望して、ただ一個の傑作がよく、一定の時期あるいは一派のいかなる多数の凡俗な作にもまさつて、われわれを教えるものであるということを忘れてゐる。われわれはあまりに分類し過ぎて、あまりに楽しむことが少ない。いわゆる科学的方法の陳列のため

に、審美的方法を犠牲にしたことは、これまで多くの博物館の害毒であつた。

同時代美術の要求は、人生の重要な計画において、いかなるものにもこれを無視することはできない。今日の美術は真にわれわれに属するものである、それはわれわれみずからの反映である。

これを罵倒ばとうする時は、ただ自己を罵倒するのである。今の世に美術無し、というが、これが責めを負うべき者はたれぞ。古人に対しては、熱狂的に嘆賞するにもかかわらず、自己の可能性にはほとんど注意しないことは恥すべきことである。世に認められようとして苦しむ美術家たち、冷たき軽侮の影にしゅんじゅん 逡巡しゅんじゅん している疲れた人々よ！ などというが、この自己本位の世の中に、われわ

れは彼らに對してどれほどの鼓舞激励を与えているか。過去がわれらの文化の貧弱を哀れむのも道理である。未来はわが美術の貧弱を笑うであろう。われわれは人生の美しい物を破壊することによつて美術を破壊している。ねがわくは、ある大だいようじゆつしや妖術者が出現して、社会の幹から、天才の手に触れて始めて鳴り渡る弦をそなえた大琴を作らんことを祈る。

第六章 花

春の東しのめ雲のふるえる薄明に、小鳥が木の間で、わけのありそ
うな調子でささやいている時、諸君は彼らがそのつれあいに花の
ことを語っているのだと感じたことはありませんか。人間につい
て見れば、花を觀賞することはどうも恋愛の詩と時を同じくして
起こっているようである。無意識のゆえに麗しく、沈黙のために
芳しい花の姿でなくて、どこに処女おとめの心の解ける姿を想像するこ
とができよう。原始時代の人はその恋人に初めて花輪をささげる

と、それによつて獸性を脱した。彼はこうして、粗野な自然の必要を超越して人間らしくなつた。彼が不必要な物の微妙な用途を認められた時、彼は芸術の国に入ったのである。

喜びにも悲しみにも、花はわれらの不断の友である。花とともに飲み、共に食らい、共に歌い、共に踊り、共に戯れる。花を飾つて結婚の式をあげ、花をもつて命名の式を行なう。花がなくなつては死んでも行けぬ。百合ゆりの花をもつて礼拝し、蓮はすの花をもつて冥め想いそうに入り、ばらや菊花をつけ、戦列を作つて突撃した。さらに花言葉で話そうとまで企てた。花なくてどうして生きて行かれよう。花を奪われた世界を考えてみても恐ろしい。病める人の枕まくらべに非常な慰安をもたらし、疲れた人々の闇やみの世界に喜悅の光をも

たらずものではないか。その澄みきった淡い色は、ちようど美しい子供をしみじみながめしていると失われた希望が思い起こされるように、失われようとしている宇宙に対する信念を回復してくれる。われらが土に葬られる時、われらの墓辺を、悲しみに沈んで低徊ていかいするものは花である。

悲しいかな、われわれは花を不断の友としながらも、いまだ禽き獣じゆうの域を脱することあまり遠くないという事実をおおうこと

はできぬ。羊の皮をむいて見れば、心の奥の狼おおかみはすぐにその齒をあらわすであろう。世間で、人間は十で禽獣、二十で発狂、三十で失敗、四十で山師、五十で罪人といっている。たぶん人間はいつまでも禽獣を脱しないから罪人となるのであろう。飢渴のほか

何物もわれわれに対して真実なものはなく、われらみずからの煩わづらひ悩なやみのほか何物も神聖なものはない。神社仏閣は、次から次へとわれらのまのあたり崩ほうかい壊して来たが、ただ一つの祭壇、すなわちその上で至高の神へ香を焚たく「おのれ」という祭壇は永遠に保存せられている。われらの神は偉いものだ。金銭がその予言者だ！ われらは神へ奉納するために自然を荒らしている物質を征服したと誇っているが、物質こそわれわれを奴隷にしたものであるということとは忘れてゐる。われらは教養や風流に名をかりて、なんとという残忍非道を行なっているのであろう！

星の涙のしたたりやさしい花よ、園に立って、日の光や露の玉をたたえて歌う蜜みつ蜂ばちに、会釈してうなずいている花よ、お前

たちは、お前たちを待ち構えている恐ろしい運命を承知しているのか。夏のそよ風にあたつて、そうしていられる間、いつまでも夢を見て、風に揺られて浮かれ気分で暮らすがい。あすにも無慈悲な手が咽喉のどを取り巻くだろう。お前はよじ取られて手足を一つ一つ引きさかれ、お前の静かな家から連れて行つてしまわれるだろう。そのあさましの者はすてきな美人であるかもしれぬ。そして、お前の血でその女の指がまだ湿っている間は、「まあなんて美しい花だこと。」というかもしれぬ。だがね、これが親切なことだろうか。お前が、無情なやつだと承知している者の髪の中に閉じ込められたり、もしお前が人間であつたらまともに見向いてくれそうにもない人のボタン穴にさされたりするのが、お前の

宿命なのかもしれない。何か狭い器に監禁せられて、ただわずかのたまり水によつて、命の衰え行くのを警告する狂わんばかりのかわき渴を止めているのもお前の運命なのかもしれない。

花よ、もし御門みかどの国にいるならば、はさみ鋏と小このこぎり鋸に身を固めた

恐ろしい人にいつか会うかもしれない。その人はみずから「生花の宗匠」と称している。彼は医者いしやの権利を要求する。だから、自然彼がきらいになるだろう。というのは、医者というものはその犠牲になつた人のわずらいをいつも長びかせようとする者だからね。彼はお前たちを切つてかがめゆがめて、彼の勝手な考えでお前たちの取るべき姿勢をきめて、途方もない変な姿にするだろう。のみ療治をする者のようにお前たちの筋肉を曲げ、骨を違わせるだ

ろう。出血を止めるために灼しやく熱ねつした炭でお前たちを焦がした

り、循環を助けるためにからだの中へ針金をさし込むこともある

う。塩、酢、明礬みょうばん、時には硫酸を食事に与えることもある。

お前たちは今にも気絶しそうな時に、煮え湯を足に注がれること
もあろう。彼の治療を受けない場合に比べると、二週間以上も長
くお前たちの体内に生命を保たせておくことができるのを彼は誇
りとしているだろう。お前たちは初めて捕えられた時、その場で
殺されたほうがよくはなかつたか。いったいお前は前世でどんな
罪を犯したとて、現世でこんな罰を当然受けねばならないのか。

西洋の社会における花の浪費は東洋の宗匠の花の扱い方よりも
さらに驚き入ったものである。舞踏室や宴会の席を飾るために日

々切り取られ、翌日は投げ捨てられる花の数はなかなか莫^{ばくだい}大なものに違いない。いつしよにつないだら一大陸を花輪で飾ることもできよう。このような、花の命を全く物とも思わぬことに比ぶれば、花の宗匠の罪は取るに足らないものである。彼は少なくとも自然の経済を重んじて、注意深い慮^{おもんばか}りをもつてその犠牲者を選び、死後はその遺骸^{いがい}に敬意を表する。西洋においては、花を飾るのは富を表わす一時的美観の一部、すなわちその場の思いつきであるように思われる。これらの花は皆その騒ぎの済んだあととはどこへ行くのであろう。しおれた花が無情にも糞土^{ふんど}の上に捨てられているのを見るほど、世にも哀れなものはない。

どうして花はかくも美しく生まれて、しかもかくまで薄命なの

であろう。虫でも刺すことができる。最も温順な動物でも追いつめられると戦うものである。ボンネットを飾るために羽毛をねらわれている鳥はその追い手から飛び去ることができる、人が上着にしたいとむさぼる毛皮のある獣は、人が近づけば隠れることができる。悲しいかな！ 翼ある唯一の花と知られているのは蝶ちようであつて、他の花は皆、破壊者に会つてはどうすることもできない。彼らが断末魔の苦しみに叫んだとても、その声はわれらの無情の耳へは決して達しない。われわれは、黙々としてわれらに仕えわれらを愛する人々に対して絶えず残忍であるが、これがために、これらの最もよき友からわれわれが見捨てられる時が来るかもしれない。諸君は、野生の花が年々少なくなつてゆくのに気はつき

ませんか。それは彼らの中の賢人どもが、人がもつと人情のあるようになるまでこの世から去れと彼らに言つてきかせたのかもしれない。たぶん彼らは天へ移住してしまつたのであろう。

草花を作る人のためには大いに肩を持ってやつてもよい。植うえき

木鉢ぼちをいじる人は花はな鋏さきみの人よりもはるかに人情がある。彼

が水や日光について心配したり、寄生虫を相手に争つたり、霜を恐れたり、芽の出ようがおそい時は心配し、葉に光沢が出て来るのと有頂天になつて喜ぶ様子をうかがつてゐるのは楽しいものである。東洋では花卉栽培かきの道は非常に古いものであつて、詩人の嗜好こうとその愛好する花卉はしばしば物語や歌にしるされてゐる。唐と宋そうの時代には陶器術の発達に伴なつて、花卉を入れる驚くべき

器が作られたということである。といつても植木鉢ではなく宝石をちりばめた御殿であつた。花ごとに仕える特使が派遣せられ、うさぎ兎の毛で作つたやわらかいはけ刷毛でその葉を洗うのであつた。牡丹ぼたんは、盛装した美しい侍女が水を与うべきもの、寒梅は青い顔をしてほつそりとした修道僧が水をやるべきものと書いた本がある。日本で、あしかが足利時代に作られた「はち鉢の木」という最も通俗な能の舞は、貧困な武士がある寒夜に炉にた焚く薪まきがないので、旅僧を歓迎するために、だいに育てた鉢の木を切るといふ話に基づいて書いたものである。その僧とは実はわが物語のハルンアルラシツド（三一）ともいふべきほうじょうときより北条時頼にほかならなかつた。そしてその犠牲に対しては報酬なしではなかつた。この舞は現今でも

必ず東京の観客の涙を誘うものである。

か弱い花を保護するためには、非常な警戒をしたものであった。唐の玄宗皇帝げんそうは、鳥を近づけないために花園の樹枝に小さい金の鈴をかけておいた。春の日に宮廷の楽人を率いで、美しい音楽で花を喜ばせたのも彼であった。わが国のアーサー王物語の主人公ともいうべき、義経よしつねの書いたものだという伝説のある、奇妙な高札が日本のある寺院（須磨寺すまであら）に現存している。それはある不思議な梅の木を保護するために掲げられた掲示であつて、尚武時代しやうぶのすごいおかしみをもつてわれらの心に訴える。梅花の美しさを述べた後「一枝を伐らば一指を剪るべし。」という文が書いてある。花をむやみに切り捨てたり、美術品をばだいなし

にする者どもに対しては、今日においてもこういう法律が願わくは実施せられよかしと思う。

しかし鉢植^{はちう}えの花の場合でさえ、人間の勝手気ままな事が感ぜられる気がする。何ゆえに花をそのふるさとから連れ出して、知らぬ他郷に咲かせようとするのであるか。それは小鳥を籠^{かご}に閉じこめて、歌わせようとするのも同じではないか。蘭類^{らん}が温室で、人工の熱によつて息づまる思いをしながら、なつかしい南国の空を一目見たいとあてもなくあこがれているとだれが知っていよう。

花を理想的に愛する人は、破れた籬^{まがき}の前に座して野菊と語つた陶淵明^{とうえんめい}や、たそがれに、西湖^{せいこ}の梅花の間を道^{しやうよう}遙^{しやう}しながら、暗香浮動の趣に我れを忘れた林和靖^{りんかせい}のごとく、花の生まれ故郷

に花をたずねる人々である。周茂叔しゅうもうもしくは、彼の夢が蓮はすの花の夢

と混ざるように、舟中に眠つたと伝えられている。この精神こそ

は奈良朝ならちようで有名な光明皇后こうみんこうごうのみ心こころを動かしたものであつて、

「折りつればたぶさにけがるたてながら三世みやよの仏に花たてまつる

(三二)。」とお詠よみになつた。

しかしあまりに感傷的になることはやめよう。奢おごる事をいつそ

ういまして、もつと壮大な気持ちになろうではないか。老子い

わく「天地不仁(三三)」。弘法大師こうぼうだいしいわく「生まれ生まれ生

まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに

冥くらし(三四)。「われわれはいずれに向かつても「破壊」に面す

るのである。上に向かうも破壊、下に向かうも破壊、前にも破壊、

後ろにも破壊。変化こそは唯一の永遠である。何ゆえに死を生のごとく喜び迎えないのであるか。この二者はただ互いに相對しているものであつて、梵ブラーマン（三五）の昼と夜である。古きものの崩解によつて改造が可能となる。われわれは、無情な慈悲の神「死」をば種々の名前であがめて来た。拝火教徒が火中に迎えたものは、「すべてを呑どんぜい噬するもの」の影であつた。今日でも、神道の日本人がその前にひれ伏すところのものは、つるぎだましい劍魂の氷のような純潔である。神秘の火はわれらの弱点を焼きつくし、神聖な劍は煩惱ほんのうのきずなを断つ。われらの屍灰しかいの中から天上の望みという不死の鳥が現われ、煩惱を脱していつそう高い人格が生まれ出て来る。

花をちぎる事によつて、新たな形を生み出して世人の考えを高こうしよう

尚うにする事ができるならば、そうしてもよいではないか。われわれが花に求むるところはただ美に対する奉納を共にせん事にあるのみ。われわれは「純潔」と「清楚せいそ」に身をささげる事によつてその罪滅ぼしをしよう。こういうふうな論法で、茶人たちは生花の法を定めたのである。

わが茶や花の宗匠のやり口を知っている人はだれでも、彼らが宗教的の尊敬をもつて花を見る事に気がついたに違いない。彼らは一枝一条もみだりに切り取る事をしないで、おのが心に描く美的配合を目的に注意深く選択する。彼らは、もし絶対に必要の度を越えて万一切り取るようなことがあると、これを恥とした。こ

れに関連して言つてもよろしいと思われる事は、彼らはいつても、多少でも葉があればこれを花に添えておくという事である。というのは、彼らの目的は花の生活の全美を表わすにあるから。この点については、その他の多くの点におけると同様、彼らの方法は西洋諸国に行なわれるものとは異なつてゐる。かの国では、花梗のみ、いわば胴のない頭だけが乱雑に花瓶かびんにさしこんであるのをよく見受ける。

茶の宗匠が花を満足に生けると、彼はそれを日本間の上座にあたる床の間に置く。その効果を妨げるような物はいつさいその近くにはおかない。たとえば一幅の絵でも、その配合に何か特殊の審美的理由がなければならぬ。花はそこに王位についた皇子のよ

うにすわっている、そして客やお弟子^{でし}たちは、その室に入るやま
ずこれに丁寧なおじぎをしてから始めて主人に挨拶^{あいさつ}をする。生
花の傑作を写した絵が素^{しろうつ}人のために出版せられている。この事
に関する文献はかなり大部なものである。花が色あせると宗匠は
ねんごろにそれを川に流し、または丁寧に地中に埋める。その霊
を弔つて墓碑を建ててゐる事さえもある。

花道の生まれたのは十五世紀で、茶の湯の起こつたのと同時ら
しく思われる。わが国の伝説によると、始めて花を生けたのは昔
の仏教徒であると言う。彼らは生物に対する限りなき心やりのあ
まり、暴風に散らされた花を集めて、それを水おけに入れたとい
うことである。足利^{あしかがよしまさ}義政時代の大画家であり、鑑定家である

相阿弥そうあみは、初期における花道の大家の一人であつたといわれている。茶人珠光しゆこうはその門人であつた。また絵画における狩野家かのうのように、花道の記録に有名な池の坊の家元専能せんのうもこの人の門人であつた。十六世紀の後半において、利休によつて茶道が完成せられるとともに、生花も充分なる発達を遂げた。利休およびその流れをくんだ有名な織田有楽おだうらく、古田織部ふるたおりべ、光悦こうえつ、小堀遠州こぼりえんしゅう、片桐石州かたぎりせきしゅうらは新たな配合を作ろうとして互いに相競つた。しかし茶人たちの花の尊崇は、ただ彼らの審美的儀式の一部をなしたに過ぎないのであつて、それだけが独立して、別の儀式をなしてはいなかつたという事を忘れてはならぬ。生花は茶室にある他の美術品と同様に、装飾の全配合に従属的なものであつた。ゆえ

に石州は「雪が庭に積んでゐる時は白い梅花を用いてはならぬ。」と規定した。「けばけばしい」花は無情にも茶室から遠ざけられた。茶人の生けた生花はその本来の目的の場所から取り去ればその趣旨を失うものである。と言うのは、その線やつり合いは特にその周囲のものとの配合を考えてくふうしてあるのであるから。

花を花だけのために崇拜する事は、十七世紀の中葉、花の宗匠が出るようになって起こつたのである。そうなると茶室には関係なく、ただ花瓶かびんが課する法則のほかには全く法則がなくなつた。

新しい考案、新しい方法ができるようになって、これらから生まれ出た原則や流派がたくさんあつた。十九世紀のある文人の言うところによれば、百以上の異なつた生花の流派をあげる事ができ

る。広く言えばこれら諸流は、形式派と写実派の二大流派に分かれる。池の坊を家元とする形式派は、狩野派かのうはに相当する古典的理想主義をねらっていた。初期のこの派の宗匠の生花の記録があるが、それは山雪さんせつや常信つねのぶの花の絵をほとんどそのままにうつし出したものである。一方写実派はその名の示すごとく、自然をそのモデルと思つて、ただ美的調和を表現する助けとなるような形の修正を加えただけである。ゆえにこの派の作には浮世絵や四条派の絵をなしている気分と同じ気分が認められる。

時の余裕があれば、この時代の幾多の花の宗匠の定めた生花の法則になお詳細に立ち入つて、徳川時代の装飾を支配していた根本原理を明らかにすること（そうすれば明らかになると思われる

が）は興味あることであろう。彼らは導く原理（天）、従う原理（地）、和の原理（人）のことを述べている、そしてこれらの原理をかたどらない生花は没趣味な死んだ花であると考えられた。また花を、正式、半正式、略式の三つの異なつた姿に生ける必要を詳述している。第一は舞踏場へ出るものものしい服装をした花の姿を現わし、第二はゆつたりとした趣のある午後服の姿を現わし、第三は閨房けいぼうにある美しい平常着の姿を現わすともいわれよう。

われらは花の宗匠の生花よりも茶人の生花に対してひそかに同情を持つ。茶人の花は、適当に生けると芸術であつて、人生と真に密接な関係を持つているからわれわれの心に訴えるのである。

この流派を、写実派および形式派と対称区別して、自然派と呼びたい。茶人たちは、花を選択することでかれらのなすべきことは終わつたと考えて、その他のことは花みずからの身の上話にまかせた。晩冬のころ茶室に入れば、野桜の小枝につぼみの椿つばきの取りあわせてあるのを見る。それは去らんとする冬のなごりときたらんとする春の予告を配合したものである。またいらいらするような暑い夏の日、昼のお茶に行つて見れば、床の間の薄暗い涼しい所にかかっている花瓶かびんには、一輪の百合ゆりを見るであろう。露のしたたる姿は、人生の愚かさを笑っているように思われる。

花の独奏ソロはおもしろいものであるが、絵画、彫刻の協奏曲コンチエルトとなれば、その取りあわせには人を恍惚こうこうとさせるものがある。石

州はかつて湖沼の草木を思わせるように水盤に水草を生けて、上の壁には相阿弥そうあみの描いた鴨かもの空を飛ぶ絵をかけた。紹巴じょうはという茶人は、海辺の野花と漁家の形をした青銅の香炉に配するに、海岸のさびしい美しさを歌った和歌をもつてした。その客人の一人は、その全配合の中に晩秋の微風を感じたとしるしている。

花物語は尽きないが、もう一つだけ語ることにしよう。十六世紀には、朝顔はまだわれわれに珍しかった。利休は庭全体にそれを植えさせて、丹精たんせいこめて培養した。利休の朝顔の名が太閤たいこうのお耳に達すると太閤はそれを見たいと仰せいだされた。そこで利休はわが家の朝の茶の湯へお招きをした。その日になって太閤は庭じゆうを歩いてごらんになったが、どこを見ても朝顔のあと

かたも見えなかつた。地面は平らかにして美しい小石や砂がまいてあつた。その暴君はむつとした様子で茶室へはいつた。しかしそこにはみごとなものが待っていて彼のきげんは全くなおつて来た。床の間には宋細工そうざいくの珍しい青銅の器に、全庭園の女王である一輪の朝顔があつた。

こういう例を見ると、「花御供はなごつく」の意味が充分にわかる。たぶん花も充分にその真の意味を知るであろう。彼らは人間のような卑怯者ひきょうものではない。花によつては死を誇りとするものもある。たしかに日本の桜花は、風に身を任せて片々と落ちる時これを誇るものである。吉野よしのや嵐あらしやま山なだれのかおる雪崩の前に立つたことのある人は、だれでもきつとそう感じたであろう。寶石をちりばめ

た雲のごとく飛ぶことしばし、また水晶の流れの上に舞い、落ち
ては笑う波の上に身を浮かべて流れながら「いざさらば春よ、わ
れらは永遠の旅に行く。」というようである。

第七章 茶の宗匠

宗教においては未来がわれらの背後にある。芸術においては現在が永遠である。茶の宗匠の考えによれば芸術を真に鑑賞するとは、ただ芸術から生きた力を生み出す人々にのみ可能である。ゆえに彼らは茶室において得た風流の高い軌範によつて彼らの日常生活を律しようと努めた。すべての場合に心の平静を保たねばならぬ、そして談話は周囲の調和を決して乱さないように行なわなければならぬ。着物の格好や色彩、身体の均衡や歩行の様子な

どすべてが芸術的人格の表現でなければならぬ。これらの事からは軽視することのできないものであった。というのは、人はおのれを美しくして始めて美に近づく権利が生まれるのであるから。かようにして宗匠たちはただの芸術家以上のものすなわち芸術そのものとなろうと努めた。それは審美主義の禪であった。われらに認めたい心さえあれば完全は至るところにある。利休は好んで次の古歌を引用した。

花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや（三六）

茶の宗匠たちの芸術に対する貢献は実に多方面にわたっていた。彼らは古典的建築および屋内の装飾を全く革新して、前に茶室の

章で述べた新しい型を確立した。その影響は十六世紀以後に建てられた宮殿寺院さえも皆これをうけている。多能な小堀遠州こぼりえんしゅうは、桂かつらの離宮、名古屋なごやの城および孤篷庵こほうあんに、彼が天才の著名な实例をのこしている。日本の有名な庭園は皆茶人によって設計せられたものである。わが国の陶器はもし彼らが鼓舞を与えてくれなかつたら、優良な品質にはたぶんならなかつたであろう。茶の湯に用いられた器具の製造のために、製陶業者のほうではあらゆる限りの新しくふうの知恵を絞つたのであつた。遠州の七窯なながまは日本の陶器研究者の皆よく知つているところである。わが国の織物の中には、その色彩や意匠を考案した宗匠の名を持つているものが多い。実際、芸術のいかなる方面にも、茶の宗匠がその天才の跡

をのこしていないところはない。絵画、漆器に関して彼らの尽くした莫^{ばくだい}大の貢献についていうのはほとんど贅^{ぜいげん}言^{げん}と思われる。絵画の一大派はその源を、茶人であり同時にまた塗師^{ぬし}、陶器師として有名な本阿弥光悦^{ほんあみこうえつ}に発している。彼の作品に比すれば、その孫の光甫^{こうほ}や甥^{おい}の子光琳^{こうりん}および乾^{けんざん}山の立派な作もほとんど光を失うのである。いわゆる光琳派はすべて、茶道の表現である。この派の描く太い線の中に、自然そのものの生氣が存するように思われる。

茶の宗匠が芸術界に及ぼした影響は偉大なものではあつたが、彼らが処世上に及ぼした影響の大なるに比すれば、ほとんど取るに足らないものである。上流社会の慣例におけるのみならず、家

庭の些事さじの整理に至るまで、われわれは茶の宗匠の存在を感じるのである。配膳はいぜんほう法はもとより、美味の膳部の多くは彼らの創案したものである。彼らは落ち着いた色の衣服をのみ着用せよと教えた。また生花に接する正しい精神を教えてくれた。彼らは、人間は生来簡素を愛するものであると強調して、人情の美しさを示してくれた。実際、彼らの教えによって茶は国民の生活の中にはいったのである。

この人生という、愚かな苦勞の波の騒がしい海の上の生活を、適当に律してゆく道を知らない人々は、外觀は幸福に、安んじているようにと努めながらも、そのかいてもなく絶えず悲惨な状態にいる。われわれは心の安定を保とうとしてはよろめき、水平線上

に浮かぶ雲にことごとく暴風雨の前兆を見る。しかしながら、永遠に向かつて押し寄せる波濤はとうのうねりの中に、喜びと美しさが存している。何ゆえにその心をくまないのであるか、また列子のごとく風そのものに御まごしないのであるか。

美を友として世を送った人のみが麗しい往生をすることができ
る。大宗匠たちの臨終はその生しょう涯がいと同様に絶妙都雅なもので
あった。彼らは常に宇宙の大調和と和しようとなつて、いつでも冥め
土いどへ行くの覚悟をしていた。利休の「最後の茶の湯」は悲壯の極
として永久にかがやくであろう。

利休と太閤たいこう秀吉との友誼は長いものであつて、この偉大な

武人が茶の宗匠を尊重したことも非常なものであつた。しかし暴

君の友誼はいつも危険な光榮である。その時代は不信にみちた時代であつて、人は近親の者さえも信頼しなかつた。利休は媚こびへつらうねいじん佞人ではなかつたから、恐ろしい彼の後援者と議論して、しばしば意見を異にするをまはばからなかつた。太閤と利休の間にしばらく冷やかな感情のあつたのを幸いに、利休を憎む者どもは利休がその暴君を毒害しようとする一味の連累であると言つた。宗匠のたてる一碗わんの緑色飲料とともに、命にかかわる毒薬が盛られることになつていくといふことが、ひそかに秀吉の耳にはいつた。秀吉においては、嫌疑けんぎがあるといふだけでも即時死刑にする充分な理由であつた、そしてその怒れる支配者の意に従うよりほかに哀訴の道もなかつたのである。死刑囚にただ一つの特権

が許された、すなわち自害するという光榮である。

利休が自己犠牲をすることに定められた日に、彼はおもなる門人を最後の茶の湯に招いた。客は悲しげに定刻待合に集まった。

庭徑をながむれば樹木も戦せんりつ慄するように思われ、木の葉のさら

さらとそよぐ音にも、家なき亡もうじや者の私語が聞こえる。地獄の門

前にいるまじめくさつた番兵のように、灰色の燈籠とうろうが立ってい

る。珍香の香が一時に茶室から浮動して来る。それは客にはいれ

とつげる招きである。一人ずつ進み出ておのおのその席につく。

床の間には掛け物がかかっている、それは昔ある僧の手になつた

不思議な書であつて浮世のはかなさをかいたものである。火鉢ひばちに

かかつて沸いている茶ちやがま釜の音には、ゆく夏を惜しみ悲痛な思

を鳴いている蟬せみの音がする。やがて主人が室に入る。おのおの順次に茶をすすめられ、順次に黙々としてこれを飲みほして、最後に主人が飲む。定式に従つて、主賓がそこでお茶器拝見を願う。利休は例の掛け物とともにいろいろな品を客の前におく。皆の者がその美しさをたたえて後、利休はその器を一つずつ一座の者へ形見として贈る。茶わんのみは自分でとつておく。「不幸の人のくちびるによつて不浄になつた器は決して再び人間には使用させない。」と言つてかれはこれをなげうつて粉碎する。

その式は終わつた、客は涙をおさえかね、最後の訣けつべつ別をして室を出て行く。彼に最も親密な者がただ一人、あとに残つて最期を見届けてくれるようにと頼まれる。そこで利休は茶会の服を脱

いで、だいじにたたんで畳の上におく、それでその時まで隠れて
いた清浄無垢むくな白い死に装束むくがあらわれる。彼は短剣の輝く刀身
を恍惚こうこつとながめて、次の絶唱を詠よむ。

人生七十

力りき圉い希咄とつ

吾わが這この宝劍

祖仏共に殺す（三七）

笑えみを顔にうかべながら、利休は冥土めいどへ行つたのであつた。

注

番号

- 一 『インド生活の組織』——The Sister Nivedita 著。
- 二 Paul Kransel 著、Dissertations, Berlin, 1902.
- 三 陸羽——字は鴻漸、桑苧翁と号した。唐の徳宗時代の人。
- 四 茶経には一之源、二之具、三之造とある。
- 五 胡人ののごとくなる者蹙縮然たり——如胡人 者蹙縮然。は高くつ。蹙縮はの針縫いの所のしまり縮まるを言う。
- 六 牛の臆なる者廉※然たり——牛臆者廉※然。牛は野

牛。廉※は衣装などの裁ち目たたみ目などのそろったさま。

これは 牛の臆むねのすじの通ったのを言う。

七 浮雲の山をいずる者輪菌然たり——浮雲出山者輪菌然。輪

菌は丸くてねじける。雲のたちのぼるさまを言う。

八 輕颺の水を払う者涵澹然たり——輕颺払水者涵澹然。涵澹

は水のさま。少し波立つ状態を言う。

九 また新治の地なる者暴雨流潦の経る所に遇うがごとし——

又如新治地着遇暴雨流潦之所経。新治の地は瓦礫がれきを去ったや

わらかな土面、雨水にあつた跡を言う。潦は路上の流水。

一〇 風炉——灰うけ、風炉とは風を通すによつて名づける。今の風炉は名のみのである。

一一 魚目——小さい湯玉を魚目にたとえる。

一二 縁辺の涌泉蓮珠——湯のにえあがるのを泉にたとえ、湯玉の多いのを連珠にたとえる。

一三 騰波鼓浪——波だち、波うつ。

一四 「華」——茶気。

一五 晴天爽朗なるに浮雲鱗然たるあるがごとし——如晴天爽朗有浮雲鱗然。雲のかたちを魚のうろこにたとえる。

一六 その沫は緑銭の水涓に浮かべるがごとし——其沫者若緑銭浮於水涓。緑銭とは水草の葉。涓はびの字が正しいであろう。

一七 一椀喉吻潤い、二椀孤悶を破る。三椀枯腸をさぐる。惟う

に文字五千卷有り。四椀輕汗を発す。平生不平の事ことごと

く毛孔に向かつて散ず。五腕肌骨清し。六腕仙靈に通ず。七腕吃し得ざるに也ただ覚ゆ両腋習々清風の生ずるを。蓬萊山はいずくにかある玉川子この清風に乗じて帰りなんと欲す。

——一腕喉吻潤。二腕破孤悶。三腕搜枯腸、惟有文字五千卷。四腕発軽汗。平生不平事尽向毛孔散。五腕肌骨清。六腕通仙靈。七腕吃不得、也唯覚両腋習々清風生。蓬萊山在何処、玉川子乗此清風欲歸去。枯腸は文藻ぶんそうの乏しきを言う。習習は春風の和らぎの舒びるかたち。玉川子とは盧同自身をさす。

一八 関尹——かんれい いんき関令尹喜。周の哲学者、姓は尹、名は喜、関の守吏であつたので、関尹子と称せられた。

一九 Dr. Paul Carus 著 Taotei king.

二〇 トラスト——trusts 購買組合の便宜を指すものであろう。

二一 こうそんりゆう 公孫竜の「堅白論」「白馬非馬論」。

二二 予として冬川を渉るがごとく、猶として四隣をおそるるがごとく、儼としてそれ客のごとく、渙として冰のまさに積けんとするがごとく、敦としてそれ樸のごとく、曠としてそれ谷のごとく、渾としてそれ濁るがごとし。——予兮若冬涉川。猶兮若畏四隣。儼兮其若客。渙兮若冰將積。敦兮其若樸。曠兮其若谷。渾兮其若濁。（老子古之善為士章第十五）「予として」は前を見、後をおもんばかるの意。「猶として」は疑いて行かざるの意。渙は物の離散するをいう。敦は敦原の意。樸はあら木。渾は混に同じ、濁るかたち。

二三 慈、險、及不敢為天下先。（天下皆謂章第六十七）

二四 那伽闍刺樹那——釈迦没後七百年頃南インドに生れる。大乘經典を研究、その弘伝者として大乘諸宗の祖師といわれる。

二五 商羯羅阿闍梨——七八九年頃南インドに生れる。インド教の復興者、婆羅門哲学の大成者として知られる。

二六 無明——経験界。

二七 馥柯羅摩訶秩多——維摩経ではこの典拠不明。維摩居士のことか。

二八 利休が「富田左近とみたさこんへ露地のしつらい教うるとて」示したものは「檜かしの葉のみみじぬからにちりつもる奥山寺の道のさびしき。」で、つづく歌は、千家流に伝える七事の式おきてが

きの一つである。

二九 見渡せば……—藤原定家作。千家流に伝えられる七事式の法策書おきてがきの一つである。

三〇 夕月夜……—「茶話指月集」による。

三一 ハルンアルラシッド——『アラビアン・ナイト』（千一夜物語）の主人公。

三二 後撰集そうじように僧正へんじよう遍昭ひんしょう作として同様のものがある。なお、ためよりあそんしゆう為頼朝臣集たのよりあそんしゆうに「折りつれば心もけがるもとながら今の仏にはな奉る」とあり、こうみようこうごう光明皇后こうみようこうごうの御詠として「わがために花は手折たおらじされどただ三世の諸仏の前にささげん」としたものもある。

三三 「天地不仁。」——原文は「仁とせず」あるいは「不仁ならんや」と読む人もあるがここには「仁ならず」として引用してある。

三四 大師作、『秘蔵宝鑰』ひぞうほうやくの序より。

三五 梵——インドの波羅門教における最高原理。

三六 花をのみ……——藤原家隆作。利休はわびの本意とてこの歌を常に吟じておつたとのことである。

三七 人生七十力圀希咄。吾が這の宝剑祖仏共に殺す——人生七

十 力圀希咄 吾這宝剑 祖仏共殺。「力圀希咄」を「リキ

イキトツ」と読むのは、元げん禄十五年出版の、河東散人りよう鶴りよう

そう葉が藤村庸軒ふじむらようけんの説話を筆録したという「茶話指月集」

の読み方によったものである。意味は徳川時代から茶人の間の問題となっていて、諸説紛々。今いま泉雄いまいずみゆうきく作氏の説では、禅の喝かつのような一種の間投詞で、「ええなんじやいの」といった意味であるとのこと。京都表千家に伝えられている利休の真蹟には「人世」、力※となっている由である。また「禅林僧室伝」巻三、雲門文偃章下に、雲門偈二云ク、咄咄咄力※希禅子訝ル中眉垂ルとある。英文には、この語句の意味を思わせるところは表われていない。

青空文庫情報

底本：「茶の本」岩波文庫、岩波書店

1929（昭和4）年3月10日第1刷発行

1961（昭和36）年6月5日第38刷改版発行

2005（平成17）年11月5日第103刷発行

入力：kompass

校正：鈴木厚司

2008年6月6日作成

2014年4月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

茶の本

茶の本

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡倉覚三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>